The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞アンドレ・マルチネ著『ステップから大洋へ：印欧語と「印欧人」』（その3：第V章）
Author(s)	Martinet, André; 神山, 孝夫
Citation	大阪外国語大学論集. 1998, 19, p. 33-80
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79767
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アンドレ・マルチネ著
『ステップから大洋へ－印欧語と「印欧人」－』
（その３：第Ｖ章）

神　山　孝　夫　訳

André Martinet :
Des steppes aux océans
—L'indo-européen et les 《Indo-Européens》 —
(Paris : Payot, 1987, 1994[2])
(Troisième partie : chapitre V)

Traduit par Takao KAMIYAMA

本誌第17号 (1997) p. 63-95、及び18号 (1997) p. 171-194所収の「その１」及び「その２」の続編を成す。今回の原稿作成に当たり数点について原著者のご教授を仰いだ。訳稿作成の経緯等については「その２」の場合と大差ないので記載を略す。諸兄のご叱正を賜れれば幸甚である。

原著者の高弟であらせられる東京外国語大学名誉教授の渡瀬嘉朗先生より「その１」について数々の有益なご意見を賜ったことを特筆しておきたい。同氏は原典に照らして拙訳を詳細にご査読下さり、訳者の不備・誤読をご指摘下さったのである。下記の暫定的正誤表はその成果の一部である。また、訳註 (44) 作成に際して古代史の専門家である本学助教授橋場弦氏にご教授並びに資料の提供を賜った。記してご両者のご協力に深甚なる謝意を表したい。

「その１」（本誌17号）正誤表（抄）

頁	行	誤	正
69	下から15	言語すべて	すべての人々
70	〃　4	少々本筋からはずれて、	(削除)
	〃　3	てみると	ることはやめておくと
79	〃　8	ドルドンニュ	ドルドーニュ
88	〃　16	のは言うまでも	とは考えられ
	〃　7	ここで問題になる	だが、ここにいたはずな
89	〃　4	初期には先住民の言語を尊重しつつも、入植民族の動的な視点を守ることが絶対に必要であった。	このような民族移動を動的に追う視点を持ち続けることが、また【移動をすると】初めのうちは先住民の言語が保たれたことを忘れないことが重要である。
92	1	浜辺に金髪	髪が金色がかるの

略語表（補遺）

Bg.	ブルガリア語	OFr.	古フリジア語	Sard.	サルディニア語
Iran.	イラン語	OW	古ウェールズ語		

第Ⅴ章
印欧諸語と語派

5.1 これまで、あまり名の知られていない言語や民族についての言及は避け、例は本書の読者の方々になじみのある、特に古典文化や西欧文化から引くことにしてきた。ギリシア人やローマ人のことは世界中でよく知られているし、ケルト人や、ゲルマン人、スラブ人といったことばを耳にすれば、こういう名前の民族に対して民族主義的な偏見を持つ向きもあったにしても、胸中に浮かぶことがなきにしもあらずだろう。このような偏見を持つようになるのはたいてい就学期である。19世紀以来、学校で教えられてきた歴史は民族の統一を強めることを特にその目的としてきたし、研究者の集めたデータの中から、この目的に添って、現実に対する一面的な、不正確な見方を不可避的に植え付けるような取捨選択がなされた。例えばフランスでは「民族」についての教育でガリアとガリア人を賛美する選択が行われた。最初の民族的英雄はローマのカエサルと刃を交えたウェルキンゲトリクス[1]だとするのである。長い間、中等教育を受けられるのは基本的に「ブルジョワ」に限られていたが、そこでは、歴史的現実についてより広い視野が取られ、民族文化のラテン的な起源ももっと自由に取り入れられていた。ゲルマンの侵略者の果たした役割が、ある種のごまかしを受けてきたことは否めない。【フランスという】国名が彼らの一派であるフランク人の名に由来するにもかかわらずである。「ゲルマン」という語が意味するのは一つであって、トルビアック（ツュルピッヒ）の戦い[2]での敵であるアラマン（アラマンニ）人も、フランク人も、同じくゲルマン人である。この事実を忘れさせようとする操作が行われているわけだが、それでも「フランク人の赤い血」を「ゲルマン人の青い血」と敵対させるなら、無意識のうちにであろうが、この思想操作に屈してしまうことになる。

5.2 先を続ける前に、言語あるいは民族について言及する際の前提をここで明確化しておく必要がある。これは、教養のある方々を含めて一般の方々のこれらについての知識を正したり、少なくともニュアンスを変えたりするためでもあるし、中には専門家以外には知られていないものも含まれているからである。

5.3 印欧諸語について記すのに、どのような順序を用いるのが適当であろうか。該当するすべての言語をアルファベットの順序に従って列挙するという方法もあろうし、ラテン語とロマンス諸

語の関係のように、同じ古代語に由来する諸言語、あるいはある時点で厳密に近親的方言であったことが確実な諸言語を一まとめにしてしまうという方法もあろう。伝統的に取られているのは後者の方法であり、ここでそれを変えるべき理由はあまり見当たらない。では、そのように決められた様々なグループをどのような順序で記すべきだろうか。地理的な区分に重きを置いて、各々のグループの住人を歴史に初めて登場する地点に留めておき、東から西へ、あるいはその逆に並べるという方法もあれば、あるいは空間よりも時間に、地理よりも歴史を重んじて配列するという方法もある。後者を選ぶにしても、研究史を重んじて、言語の比較に最も古くから用いられてきた言語から始めることもできるし、言語自体の歴史を重んじて、より古い時代に共通の幹から分かれ、より早期にアイデンティティーを獲得した言語から始めることもできる。これらの配列の主義のうちどれを選んだらよいか、迷うのも当然である。本書では結局のところ研究史を重んじた配列をすることにしたが、その理由は単に、この配列にすれば、概してよく知られた言語からあまりよく知られていない言語へという順序で進むことになるし、後に発見されたり解読されたりした言語の位置づけや分類の基準となる諸特徴が前半部で出てくるからである。

5.4 最初の課題は、以下で用いる諸グループがどのように構成されるのかを知ることである。あらゆる研究者に受け入れられている比定や分類が存在する一方で、中には論争の対象となっているものもある。例えば、独立したゲルマン語のグループを設定することに関しては何の問題もない。このグループ内でスカンディナヴィアあるいはノルド下位グループと、ドイツ語、オランダ語、英語、フリジア語が含まれる西の下位グループとが区別されることにも異論はない。後者の中ではテウトニアの言語たるドイツ語とオランダ語が英語及びフリジア語と一線を画している。しかし、今日消滅してしまった言語、すなわち豊富な文証を持つゴート語と、文証の少ないブルグンド語については、これらのために独立した東の【下位】グループを設定すべきか、あるいは一部の音論的特徴を基にスカンディナヴィア下位グループに含めたものか、あるいはまた語彙の特徴を基に西の下位グループに入れたものか、判断に迷う[3]。ゲルマン語グループのこのような特徴の対極に「バルト・スラブ語」グループのケースがある。このうちスラブ諸語は完全なまとまりを成すが、それらといわゆるバルト諸語との類似性が本質的に起源的同一性に起因するのか、あるいは比較的新しい接触に起因するのかよくわかっていない[4]。

ケントゥムとサタム

5.5 様々な言語の共通点と相違点を平易に記そうとするのであれば、諸々のグループと下位グループを扱う必要上、印欧諸語をいわゆるケントゥム (centum)[5] 語とサタム (satem) 語に分ける伝統的な二分割法から始めるのが得策と思われる。centum というのはフランス語の cent「100」にあたるラテン語の形であり、古典時代の発音はフランス語ふうの saint homme【聖人】のような [sẽtɔm][6] でも、【イタリア語ふうの】[tšentum][7] でもなく、語頭は [k] と読まれる。satem というのは厳密には satəm であるが、これは同じ語のイラン【のアヴェスタ】語の形である。この語【の第一音

節】は鼻音性のない母音を示しており、また初源的と考えられる語頭の [k] が歯擦音[8]に転じているのが見て取れる。この現象は、【本来的に語頭が [k] である】cent と【ラテン語の sine に起因するためもともと語頭が [s] である】sans【"without"】を発音の上で区別しないフランス人としては、全く驚くに値しないことである。しかし、ラテン語の c と書かれる [k] が、硬口蓋と呼ばれる部位である口の中の前方で調音される母音である i と e の前では硬口蓋化され、イタリア語で [tš]、スペイン語で歯間音の [þ][9]、フランス語で [s][10]に転じている点に注意しなければならない。いわゆるサタム語群においては、後続母音の如何に関わらず、原則的にすべての [k] が硬口蓋化を受けるのである。ロマンス諸語の場合と全く同じように、硬口蓋化の結果は言語によって異なる。ロシア語ではイラン語と同様に s だが、リトアニア語では [š] であるし、サンスクリットでは硬口蓋の歯擦音、すなわちドイツ語 ich の ch にあたる音になっている[11]。また、[k] だけではなく、同じ調音点で調音される閉鎖音はすべて同様に硬口蓋化を受ける。例えば、Lat. gnō-sc-ō, gnō-v-ī [12]「知る」の g は同じ意味である R zna-t´の z に対応している。イタリア語でも同様の【無声音と有声音が平行的な発達をする】現象が観察され、cento「100」に見られるように【硬口蓋化によって無声の [k] は】[tš] となり、gelare「凍らす」のように【[g] は】その有声音である [dž] となっている。フランス語とスペイン語では、このような無声音と有声音との平行した発達は行われていない。【フランス語の場合には】cent のように無声【の [k]】はスー音の [s] となるのに、geler のように【有声の [g] は】シュー音の [ž] となる。スペイン語では ciento のように【[k] は】歯間音の [þ] となり、helar のように【[g] は】h すなわちゼロとなっている。

5.6 satem の発達【を生じた言語を持つ諸民族】が、特定の政治的あるいは民族的統一を持っていたなどと考える必要は必ずしもなかろう。独立したゲルマンのグループが想定された際にもこのような考えが横行したが、これは恐らく誤りである。接触をすでに失った諸種族にも、平行的な発達がありえたはずである。しかし、以下で見るように、地図上でのサタム諸語の配置は全く偶然などではない。

5.7 印欧諸語の中でフランス語がサタム語であるなどと言われることはない。なぜなら、ケントゥムとサタムの対立は、先史時代に行われ、また時間的及び空間的にロマンス諸語を生んだプロセスとは全く別個のプロセスによって生じているからである。サタム語が生じたプロセスは非常に大ざっぱに言って紀元前第三千年紀のことであろうし、ロマンス語が生じたプロセスは紀元後二世紀のことである。また、英語の hundred に見られるように、ゲルマン語では古い k が初期の文献において h で現れる [13] が、同様にゲルマン語もケントゥム語群の一員とみなされる。F corne とそれに対応する E horn [14] 等も参照されたい。ついでながら、この k が h となる変化が始まったのは紀元前 6 世紀以降のことである。Gk. kánnabis、Lat. cannabis と呼ばれた麻がヨーロッパに広まったのはこの頃のことであって、ゲルマン語はかなり早期にこの語を借用し、E hemp や G Hanf 等の現代の形態が示すように k が h に転じているのである。

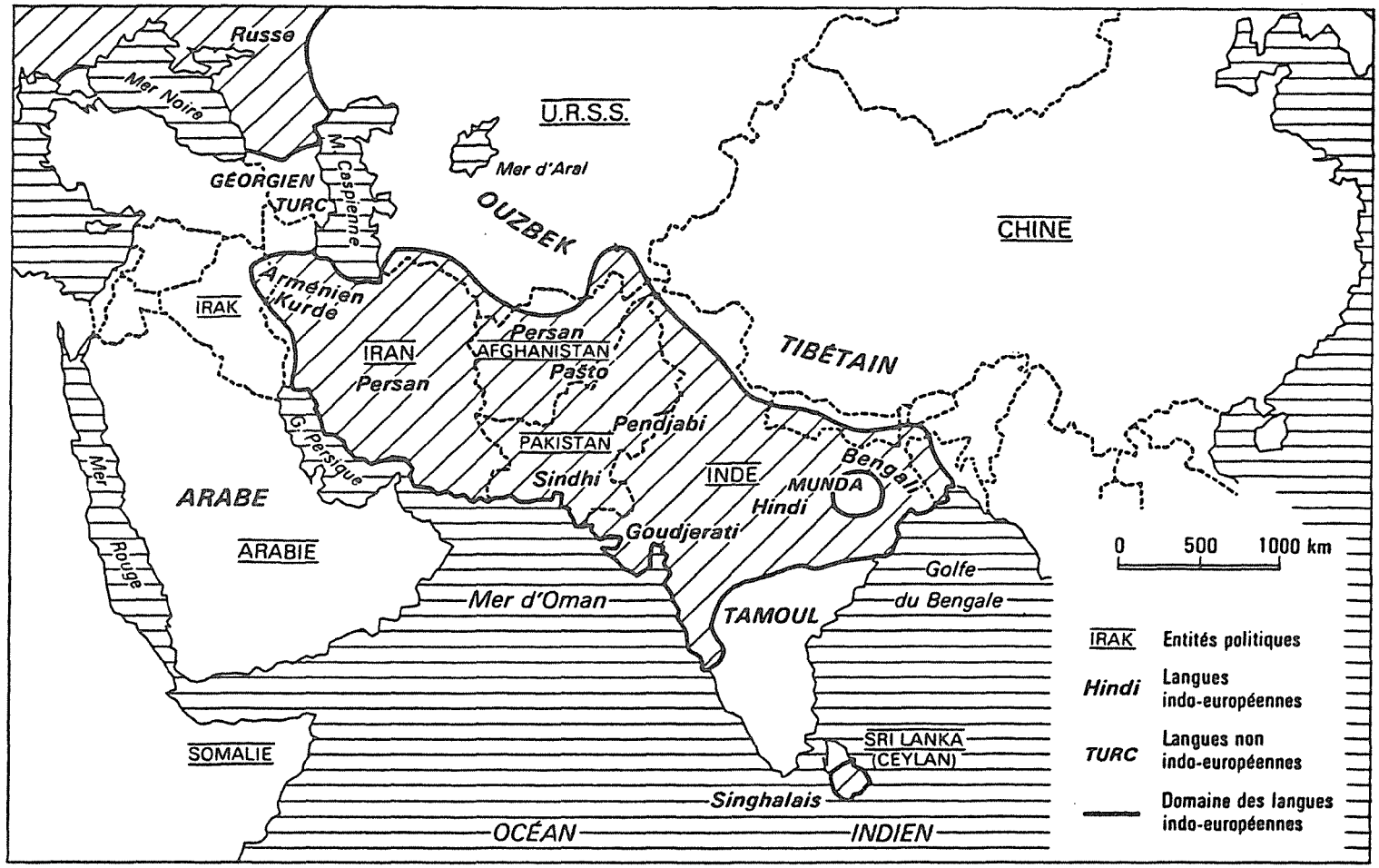
5.8 ゲルマン語における k から h への変化はラテン語やロマンス語に見られる固有名詞の形態の中

にも痕跡をとどめている。紀元前3世紀からその存在が知られていたキンブリ族のラテン名Cimbrīには語頭の [k] が保たれている[15]。時代を下ると、ヘッセン人のラテン名 Chattī では帯気音の [kʰ] が ch で表記されていると考えられる。さらに時代を下ってメロヴィング王朝の時代には、ゲルマン語の【[kʰ] から転じた】[x] ――ドイツ語の ach の ch、あるいはスペイン語のホタ (j) の音――が、Clovis に見られるように、ロマンス語の話し手によって [k] で写されていた。この音【[x]】は8世紀から始まるゲルマン語のテキストでは h で記され、上記の人名は Hluodowig (G Ludwig) となり、これがラテン語化されて Ludovicus、さらにフランス語で Louis に至っている[16]。これは語頭の C-だけが異なるが、書記法の上で上記の Clovis と同一であって、実際 Clouis とも書かれた。今日でもバスク語の Koldo（＝ Louis）には古いロマンス語の*Klodo-の語頭の [k] が保たれており、この言語では語頭の子音連続が許されないため l がメタテーゼを受けている。

5.9 サタムの発達はもう一つの現象と密接な関係がある。古い印欧語に唇軟口蓋音の系列が想定されている。これは唇の丸目を伴って発音された [k] 及び [g] のタイプの子音であり、その唇音的要素が子音の閉鎖が開放された後にも聞こえたと思われる。ラテン人がその無声音を qu と二つの文字を用いて記したのはこのためである。

5.10 ラテン語を初めとするケントゥム語においては、疑問詞の quis【何、誰】の語頭の唇軟口蓋音が保たれる。他方、[k] が硬口蓋化する諸言語【=サタム語】においては、qu（音声記号では [kʷ]）が単純化して [k] になる。この現象は上記の例語に対応する Skr. kas【誰、何、どんな】や R k(to)【誰】に現れている。これと同様の現象はロマンス語にも生じている。例えば Lat. cīvitātem [17]「都市」の c-は硬口蓋化によって It. città の [tš]、Sp. ciudad の [þ]、F cité の [s] となったが、【Lat.】quis は It. chi [ki]、Sp. qui(en)、F qui となり、いずれも [kwi] ではなく [ki] が現れている。後に、フランス語で a が [e] に近づき、その前で [k] が硬口蓋化した（例えば【Lat.】cārum > cher [18]【貴重な】）が、それによって qu も上の場合と同様に [w] を失った。こうして例えば quand は [kã] [19] と発音されるようになったが、他方 It. quando と Sp. cuando は [w] を保存している[20]。ゲルマン語も古い時代に唇音の要素を保った。イギリス英語の which [witš] に生き残ったのが、古い [kʷ] の唯一の要素である。他方、アメリカの発音では [kʷ] の [k] の部分に対応する [h] が保たれており、[hwitš] となっている[21]。

5.11 現代世界の中でケントゥム語とサタム語の分布はかなり整然としており、ケントゥム語は西に、サタム語は東に位置している。「100」を例に取ると、ケルト語では例えば Ir. cét [kʲe : d][22]、Br. kant であり、ゲルマン語では hund-のように [k] に起因する h が語頭に現れ、またラテン語では centum [kentum] であって、これらの言語群は領域の文字通り西に位置している。ギリシア語では (he)katón であって、[k] が保たれているが、今日ではこの言語の周りにあるのはアルバニア語、セルビア語、マケドニア語、ブルガリア語といったサタム語ばかりであって、そのうち後ろの三つはスラブ語である。その東には、šimtas を持つリトアニア語【等のバルト語】、sto を持つロシア語【等のスラブ語】、satəm を持つ【アヴェスタ語等の】イラン語、çatám を持つサンスク



原図9　南西アジアにおける今日の印欧諸語

リット【等のインド語】があり、非常に古い時代に [k] のタイプの閉鎖音を硬口蓋化した言語がまとまっている。有声音の場合には「知る」という上で述べた動詞を例に取ると【Cf. 5.5】、Lat. gnō(scō)、Gk. (gi)gnǒ(skō) では [g] が保たれ、ゲルマン語では規則的に [k] となって、E know のスペリングに残っているが、一方、R zna(t´)、Lith. žìno「(彼は) 知っている」、Iran.【Av.】žnā(tar-)「精通者」、これと同じ意味の Skr. jñātá- [23] では様々に硬口蓋化を生じている。

5.12　20世紀の初め、中国領トルキスタンにおいて、トカラ語 [24] と呼ばれる言語が発見され、その素性が確認されたことで、上記のようなかなり整然とした地理的分布は不完全であることが明らかとなった。その位置が非常に東であるのに、これはケントゥム語であり、「100」は kənte [25]、疑問詞【Lat.】quis に当たるのは kʷse [26] であり、その上付きの u によってその k [27] が唇軟口蓋音であることが示されている。これよりわずかに遅れて、1917年にヒッタイト語が解読され、小アジアにもう一つのケントゥム語があったことがわかった。この言語では「心 (臓)」は kartis であり、ここには Lat. cor【<*cord】、Gk. kardía、Ir. cride [28] に見られる [k] が現れており、E heart では規則的に [h] が、他方 Lith. širdìs、R serdce、Arm. sirt ではシュー音及びスー音が対応している。ヒッタイト語の疑問詞 kwis には唇軟口蓋音が保存されている。

5.13 予想に反して領域の東側にもケントゥム語があるわけだが、ヒッタイト語の場合は、この言語とその他のアナトリア語が共通の幹から分離したのが、硬口蓋化【=サタム化】の傾向が広まる以前であったと考えることによって説明されよう。トカラ語の場合には、これと同じように古く分離したと考えられる根拠が何も見当たらず、西から東へ移動したのではないかと思われる。興味深いことに、領域の両端、すなわち西ではアイルランド語とブルトン語、東ではトカラ語のみに見出される印欧語の語がある。それは*kʷ̥jo と再建される婦人を表す語で、接尾辞が加われば若い娘の意ともなる。アイルランド語には caile と接尾辞を加えた cailín [ka'l'i : n'] [29] があり、後者から若いアイルランド女性を意味する英語の colleen が借用されている。ブルトン語では古い*kʷl-が規則的に pl-となり、これに異なる接尾辞を加えて同じ意味の plac'h【[plax]】が作られる。トカラ語には kʷlyi があり、これは見てくれは異なるが、Ir. caile と正確に対応している。

インド・イラン語派

5.14 最初に印欧語のこの語派を扱うことにする。比較言語学誕生の発端となったのがインドの言語であるサンスクリットの西洋人による発見だからである。インド・イラン語をかつて話していた、また話している諸民族はしばしばアーリア人と呼ばれている。この呼び名を「印欧人」全体の意味で用いるのは誤りである。この語は、民族社会主義者が30年代と40年代にユダヤ人に対し非ユダヤ人を敵対させるために用いたのであるから、なおのこと用いるべきではない。ドイツ人と同盟関係にあったハンガリー人と日本人は「名誉アーリア人」と呼ばれることがあった。

5.15 この語派とその他すべての語派が異なる最も大きな特徴は、他の語派では区別される二つの

母音が長短に関わらずａと混同されてしまうことである。これらはギリシア語、ラテン語、ケルト語ではｅとｏ、その他の言語ではｅとａとして区別される。ただし、インド人とイラン人がかつて一つの社会を共有していたことを示す点は他にも数多くある。しかし、いくつかの事実に基づけば、彼らはかなり早期にインド語派とイラン語派に分裂したと考えられる。紀元前第二千年紀に小アジアにあったミタンニ王国の首領の名前はインド人特有のものと解釈される[30]。これに従えば、両者が分裂したのは紀元前二千年頃であったとみなされよう。一部の研究者は、その分裂がもっと以前に行われたと考えている。インド人はインダス川流域にまで達し、その地名から自分達の民族名を得たが、彼らがこの地に達するまでにイランの地を通ったことは確実である。だが、彼らがイラン人と行動を共にしていたというわけではなく、イラン人は後に取り残されている。

イラン人

5.16 イラン人は歴史時代の居住地がイランであったためこのように呼ばれているが、彼らが古く居住あるいは支配していたのは、西アジアの大部分であり、その地域は今日のシベリアに当たる地のすぐ近くにまで至っていた。ここで彼らは、別の語族に属すフィン・ウゴール人と接触し、後者はイラン語から借用語を受け入れている。このあたりに行われたイラン語のうち隆盛を誇ったのはソグド語であったが、決してこれがこの地の唯一の言語であったわけではない。古典著作にスキュタイ人の名で出てくる民族もイラン人に数えられ、彼らの後に今日の南ロシアに当たる地に移住したサルマート人も恐らく言語の点でイラン人と考えられる。スラブ人の祖先がイラン語から借用語を受け入れたのは間違いなくこの南ロシアにおいてである。

5.17 最も古く文証されるイラン語は古代ペルシア語とアヴェスタの言語である。古代ペルシア語は、紀元前７世紀から紀元前５世紀の間に、アッカド起源の【楔形】文字で刻まれた碑文によって文証される。これはイラン語の西の方言であって、本来ペルシアというのはイランのペルシア湾岸地域のことである。これはギリシアに脅威を与えた軍を擁する支配者の言語であった[31]。マズダ[32]教の聖典であるアヴェスタは様々な時代に書かれた宗教的文書の集成であり、その言語学的解釈は微妙である。その一部【＝ガーサー】はインドの最古のテキスト【＝リグ・ヴェーダ】と同様に古風な言語で書かれている。この言語は古代ペルシア語よりも東の方言である。今日、イラン諸語には、イランの公用語であるペルシア語以外に、イラン、イラク、トルコで話されるクルド語、アフガニスタンにおいてペルシア語と競合関係にあり、パキスタンにも及んでいるパシュトー語がある。コーカサスに孤立してオセット語が行われるが、これは多分古代のスキュタイ人の言語の末裔である。

インド人

5.18 本来の意味でのインド人は、その名を冠した半島内に少しづつ広まり、それに連れて非印欧

語のドラヴィダ系の言語を話す【先住】諸民族は遠方に追いやられたと考えられる。タミール語を代表とするこれらの言語は、この亜大陸の南東部、及びイラン領に至るまでの北部の孤立した言語島に今日まで保存されている。

5.19 インドの言語の最古の形態は、バラモン教の聖典であるヴェーダの中でも最も古風な部分であるリグ・ヴェーダに文証される。このテキストの言語はいわば「雅言」(l'《élaborée》) を意味する「サンスクリット」の名で知られている。これはドラヴィダ語の地域を含めて、インド全体の文化語として確固たる地位を獲得している。サンスクリットの初期のテキストは後代のものだが、口伝によって、紀元前千年以前と考えられるより古い言語形態を提供している。この文語と並んでプラークリットと呼ばれるより改新を経た日常語もかなり早期のうちから存在していた。

5.20 今日では、ベンガーリー語、グジャラーティー語、パンジャーブ語といった多くのインド語が存在するが、インド国の公用語は英語とヒンディー語である。ヒンディー語はヒンドースターニー語の一つの文語形態であり [33]、サンスクリットと同じようにデーヴァナーガリーと呼ばれる文字で記される。多くの語彙がサンスクリットから【ヒンディー語に】借用されており、この事情はラテン語とギリシア語がヨーロッパ諸語に多くの語彙を供給したのとやや似ている。デーヴァナーガリーは同じタイプの他の文字 [34] と併用された。これは本来的なアルファベットというよりも音節文字であって、その各々の【子音を表す】文字は子音の後に [a] が続く音価を持っている。【子音に続く】母音が長い [a] であるときや、他の母音であるときには、【単独では子音プラス [a] を表す文字の】後、あるいは上に符号が加えられる [35]。文字の方向は西洋のアルファベットと同じく左から右である。デーヴァナーガリー文字は非常に特徴的な形をしている。一つの語を形成する文字全体の上にほぼ途切れのない水平の線が書かれるのである。ヒンドースターニー語のもう一つの文語形態にウルドゥー語がある [33]。数多くのペルシア語からの借用語が特徴的であり、アラビア文字で書かれるこの言語は、インドとパキスタンのイスラム教徒に用いられている。

5.21 インド語の中で異彩を放つのはジプシー語であり、この言語の話し手は少なく見積もっても千五百年前にインドを出たと考えられる。しかし、インドにも明らかなジプシーが残っており、世界の他の地域にいる同族と同じく遊牧活動を営んでいる。

5.22 サンスクリット及びある程度現代インド諸語を特徴付けているのはその子音体系であり、これはイラン語の場合とは大きく異なる。その豊富さと均整の取れた様は初期の比較言語学者に感銘を与え、結果的に彼らはこれを彼らの再建の基礎に置いたのであった。これらの言語には反り舌音 [36] すなわち舌尖を後ろに反り返して口蓋に密着させることによって調音される子音の系列が存在し、これは早期の段階からインド語に特有の事象と解釈された。だが、例えば唇音であれば p ph b bh のように、閉鎖音の四系列は長い間、また一連の研究者には今日でも「母語」すなわち印欧祖語からの正確な遺産であるとみなされている。サンスクリットを基にした完全な表は下記のごとくである [37]。

p	t	k´	k	k^{w}
p^{h}	t^{h}	k^{h}´	k^{h}	k^{hw}
b	d	g´	g	g^{w}
b^{h}	d^{h}	g^{h}´	g^{h}	g^{hw}

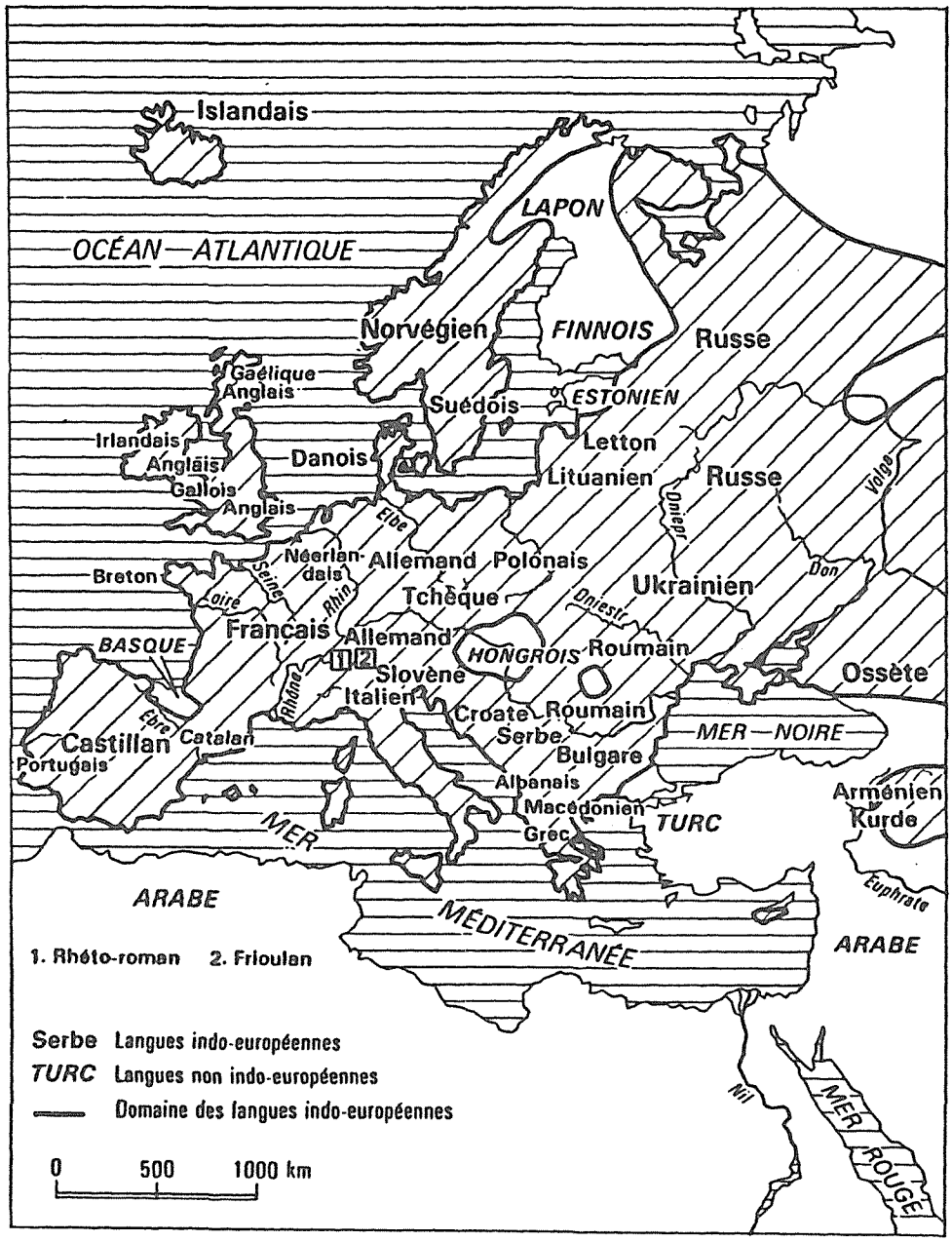
5.23 この表が示唆するのがどんな子音体系なのかは後【9.3ff.】に述べる。イラン語では反り舌音が欠落しており、サンスクリットの四系列が二系列 (p, t,..., b, d,...) に減っている。イラン語ではサタムの発達によって [k] から生じた【新しい】s と、ケントゥム語とサタム語に共通の【古い】s とが混同されたが、インド語では両者の区別が保たれた。

アルメニア語

5.24 小アジアとコーカサス山脈の接点であるアルメニアにおいて今日まで存続しているアルメニア語は、その話者が迫害を受けたために、分散する憂き目を見た[38]。今日、アルメニア人のコミュニティーは【旧】ソ連にも、フランスにも、レバノンにも、合衆国その他にも、いたるところにある。アルメニア人はその南東の隣人から数多くの借用語を受け入れたために、しばらくの間アルメニア語はイラン語の一種であると信じられていた[39]。【例えば】アルメニア人の名に特徴的な -ian という末尾の部分は、実はイラン語起源である。実のところ、この言語は非常に特殊な印欧語であり、ゲルマン語の場合にも似た子音推移を経験している。すなわち、まず初めに無声音が帯気音化し、例えばギリシア語の tarsós「【本来はチーズ用の】乾燥釜」[40]に t'aršamim「私は乾かす」[41]が対応する。ラテン語 diēs に対する tiv [42]「昼間」のように有声音は無声化し、ギリシア語 thugátēr (th は*dh より) に対する dustr [43]「娘」のように古い「有声帯気音」は単純な有声音となった。もっとも、このようなアルメニア語とゲルマン語の並行関係は細部においても行われているわけではなく、両者が特別に近い関係にあると言えるわけではない。規則的発達の結果、【アルメニア語の】形態は、同じ語族の他の言語の形態と非常に異なる場合が多々あり、一見したところ比定するのが難しい。例えば「２」は erku であって、これは初源的*dwō（ラテン語 duō, ギリシア語 dúo）と厳密に対応している。*dwō の-w-は-g^{w}-を経て-g-となり、これが【上記の子音推移の結果】無声化して-k-となる。この場合に d は r に転じ、子音結合-rk-が発音困難のため添頭母音 e-を獲得したのである。

アルバニア語

5.25 この言語の記録は１６世紀以前にはほとんどない。この言語にはスラブ語やら、トルコ語、ギリシア語、ロマンス諸方言からの借用語があふれており、本来の由緒正しい語彙は何と全体の一割もない。アルバニア語は比較言語学上の諸問題を解決するのに役立つよりも、むしろ問題を生じる言語の一つである。アルバニアの地理的位置を根拠にして、この言語をイリュリア語と結



原図10　ヨーロッパにおける今日の印欧諸語

び付けようとする試みが数多く行われた。実際、ギリシア人は今日のアルバニアのあるあたりをイリュリアと呼んでいた。その後、ローマ人はもっと北の、今日のクロアチアとスロベニアあたりをイリュリアとした。残念なことに、当時これらの異なる地域に行われていた言語について、あまり役に立たない地名を除いてはほとんど何も知られていない。「イリュリア語」というレッテルは事実上何に対しても使えたのであり、アドリア海周辺にあって、印欧語の他の語派に帰属さ

せられていない複数の言語に、このレッテルを貼る試みがなされた。このようなことがヴェネツィア（ヴェネト）のヴェネト語、【イタリア半島南部の】アプーリア（プーリア）とカラーブリアに碑文を残すメッサピア語に対して行われたのである。調査の結果、ヴェネト語はイタリア半島の他の言語、特にラテン語と近いことがわかった。メッサピア語に関しても、この言語とアルバニア語との近親関係についての明白な証拠が欠落しており、これに「イリュリア語」として洗礼を与えても、メリットはなさそうである。

5.26 パレスチナのペリシテ（フィリスティア）人の言語をイリュリア語に関係付ける試みも行われている。パレスチナはギリシア語で Palaistīné であり、これは【ギリシア北西部】エーペイロス（イピロス）地方のパライステー (Palaistḗ) [44] という町の名によく似ている。また、【北東部】トラキア（トラーキ）地方のストリュモン（ストルマ）川は古くは Palaistînos と呼ばれていた。考察によれば、原著 p. 60【4.34】で触れた、いわゆる「長剣族」が紀元前第二千年紀にヨーロッパ北部からやって来て【バルカンを】襲撃し、さらに勢い付いて、陸路か海路かは不明だが、今日のガザの地にまで至ったのではないかと考えられる。ペリシテ人についてはその名前と、ヘブライの伝説が語ることのみが知られている、という点を指摘するにとどめておく。

5.27 アルバニア語がサタム語であるのは確実である。ただし「100」に当たる語は [ḱent] であるらしく、硬口蓋化した [k] が生じているが、これはロマンス語からの借用語と考えられよう。この言語で*k は [s] あるいは [θ] で現れる。例えば Gk. (w)oīkos「家」、Lat. vīcus「地区」に対して vis [45]「場所」、【Gk.】konís「しらみの卵、埃」に対してθɛni [46] のごとくである。*g と*gh は [s] [θ] に対応する有声音、すなわち [z] [ð] となる。例えばラテン語 (vī)-gintī「20」に対して -zet [47]、ギリシア語 gómphos「大釘」に対してロシア語の zub と同様に ðemp [48]「歯」、ギリシア語 érkhomai「私は来る」に対して erða [49]「私は来た」。これらの音と初源的*s の結果とは合一したわけではなく、後者は硬口蓋音に隣接すると [š] に (*suei に遡るギリシア語 húei「雨が降る」に対して šī「雨」[50])、それ以外ではある時には h に、またある時にはそのかつての有声の対応音であるγになる。γは特別な環境に生じたらしい。例えばラテン語 sulcus「畝」に対して hel´k´ [51]「彼は引く」だが、ラテン語 serpō「這う」に対してγarpɛr [52]「蛇」となっている。このことを考慮すると、アルバニア語はむしろマケドニア語 [53] やさらにはトラキア語のようなもっと東の言語と比定されるべきかもしれない。これらの言語については、後者がサタム語であること以外、ほとんど何もわかっていない。

バルト・スラブ語派

5.28 これはサタム語であって、特徴的なのは、サンスクリットを基にして設定される閉鎖音の四系列が二系列だけ、すなわち/p/の系列と/b/の系列のみで現れることである。これはイラン語と共通した特徴であるが、【バルト・スラブ語はイラン語のように】母音の [e] と [a]、及び古い時代

には恐らく [o] と [a] も混同していない点が大きく異なる。

バルト語

5.29 バルト語とスラブ語は分けて扱うべきであろう。前者が文証されるのはアルバニア語と同様に非常に遅く、16世紀のことである。しかし、バルト語はアルバニア語のように通過場所にあるわけではなく、もっと保守的で、その印欧語的な性格ははるかに明白である。

古プロシア語

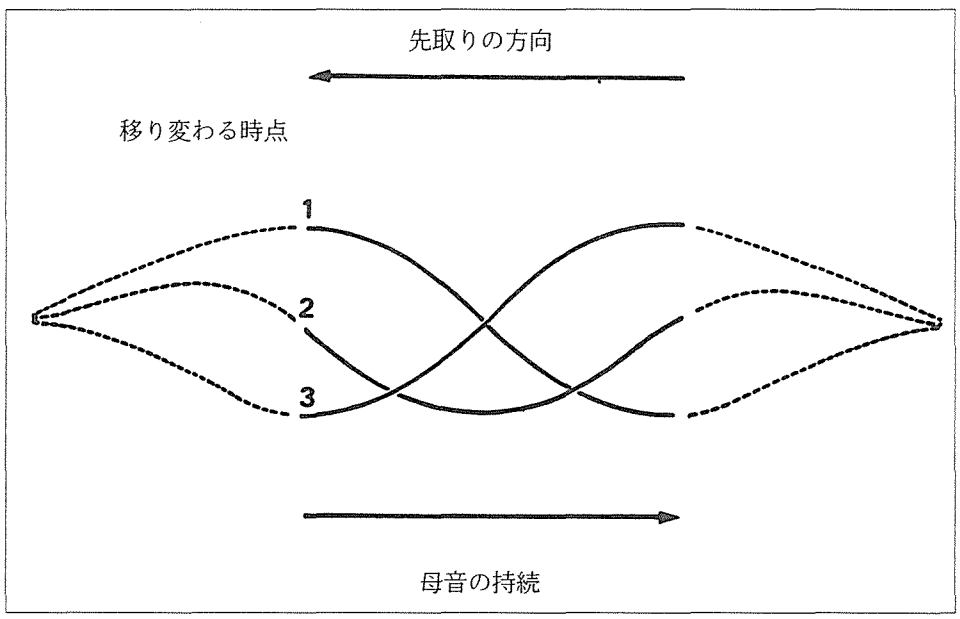
5.30 【バルト語の中で】年代的に言ってもっとも古いのが、今日では消滅してしまった古プロシア語である。ドイツ語を話す福音伝道者によって作成された教理綱要 (catéchisme) [54] によって知られ、その文字はドイツ語の場合のように読まれる。例えば「舌、言語」という意味の insuwis は [inzuvis] [55] と、「魚」という意味の suckans（複数対格）は [zukans] [56] と読まれる。

リトアニア語

5.31 今日まで絶えることなく話し続けられてきたリトアニア語は非常に古風な特徴を持っている。古プロシア語と同じく、この言語にはラテン語の -us やギリシア語の -os に対応する語尾【-as < IE *-o-s】がそのまま保存されている。アクセントのある長母音あるいは二重母音 [57] には二種類の音調 (tons) [58] が区別される。これらの音調はおのおの異なる時代に行われた延長に対応している [59]。acute【´】で記される音調は、高い音から始ま【り、その後下降す】るもので、例えば žinóti [60]「知っている」に現れる。ギリシア語に用いられるような circumflex【ˆ】[61] はその母音の終わりに向けて上昇する音調を示し、例えば eĩti [62]「行く」に現れる。šim̃tas「百」という語を用いてこの言語の多くの特徴が説明できる。まず、語頭の *k がサタムの扱いを受けており、二重母音とされる音連続-im̃-の上にのせられた circumflex によって音調の存在が記されている。主格の語尾 -s が保たれているが、この場合には本来的な *-om が -as に置き換えられている。この言語は一般にとても古風なのだが、ロマンス語のように中性と男性とを混同するという改新を経験したのである。したがって、中性の語尾-om が【男性の】-os に置き換えられ、これが-as となった。

5.32 印欧祖語の音調の特徴を見極めようと、リトアニア語とギリシア語にある二つの音調の検討が長い間行われてきた。かなり可能性の高いことに、バルト・スラブ語、ギリシア語、ゲルマン語を含む多くの語派が並行的な発達を行い、その過程で特定の条件下で新たな長母音が生じ、その結果として二つの音調が区別されるようになったと考えられる。隣接し、その二番目にアクセントがある二つの短母音の縮約によって、ある長母音が生じた場合を考えてみよう。例えば-oó-が-ō-になったとする。予想されるように、音程がどこかで上がるとしたら、楽譜の上ではその-ō-の初めの部分よりも最後の部分が高い音になるはずである。この場合にリトアニア語ではギリシア語と同じように circumflex が記されるのである。他方、母音の後に子音が続いて、その子音が

時を経る間に母音を伸ばしてそれ自身は無音となってしまうような場合もある[63]。ちょうどこれは古仏語の paste (これを借用した英語の paste に残っている) の s はその前の母音を延長させて脱落し、その結果 pâte となったことにも見られる[64]。このような場合にメロディーの頂点となるのは、当然ながらその長母音の初めの部分、すなわち以前から母音であった部分であろう。したがって、前の【circumflex の】場合に音程が上昇したのと同じように、この【acute の】場合には音程は下降することになる[65]。このような発達が、バルト・スラブ語のみならずギリシア語やゲルマン語にも想定されるはずである。フランス語の例えば pâte に用いられるいわゆるアクサン・シルコンフレックス【^】は、その形も意味あいもリトアニア語やギリシア語の circumflex【~】と異なる点に注意を要する。本書ではギリシア語を転写するときにフランス語ふうのシルコンフレックスを用いることがあるが、これはあくまでも便宜上のことである。



原図11　頭高調から頭低調への発達

ラトビア語と音調の先取り同化 (anticipation) [66]

5.33 リトアニア語と比べると、ラトビア語は一般にバルト語のより発達を経た段階を示している。ラトビア語では音調がリトアニア語の場合の逆になっているように見える。つまり、リトアニア語では音程の頂点が母音の終わりにある場合に、ラトビア語ではそれが母音の初めにある、あるいはその逆なのである。これには始終驚かされる。一見したところでは、このような入れ代わり (chassé-croisé) がどうして起こるのか、見当も付かないからである。実際にはこの事情はかなり単純である。【この言語では】メロディーの頂点が語や形態の識別に参与するのだが、この頂点を

目立たそうとすれば、その前後の音程が下げられることを考えてみればよい。話者が次に行われる調音を先取りすることは、それがたとえ音の高さの調音であってもめずらしいことではない。問題の二つの音調について、このようなメロディーの先取りが少しづつ行われたと仮定してみよう。一方では žinóti のような「頭高」の音調が eĩti のような「頭低」の音調と対立する体系から出発する。上に記す図は前者の音調 (žinóti タイプ) の発達を記したもので、曲線の実線の部分が母音に一致し、知覚される部分に相当する。第一の時点は1と記した曲線に相当する。第二の時点では、žinóti の問題の母音の初めが曲線の頂点ではなくなり、その後に来る低音部へと続く下降部に一致することになる。これは図の曲線2に示されている。もう一方の音調 (eĩti のタイプ) については、問題の母音の初めが曲線の最低部でなくなり、上昇部と一致することになる。この第二の時点で、žinóti の「下降」調は eĩti の「上昇」調と対立することになる。第三の時点では、žinóti の母音の初めが曲線の低音部と一致してしまう。この状態が図の曲線3に示されている。eĩti の持つもう一方の音調については、母音の初めが曲線の頂点と一致してしまう。こうして第一の時点と同じく、「頭低」調と「頭高」調との対立が再度生じることとなるが、かつて頂点を初めに持っていた語は頂点を終わりに持つようになり、終わりに持っていた語は初めに持つようになる。

5.34 言語の発達を引き起こしたり、その速度を早めたりするのは、一般的に言って、異なる言語を話す諸民族間の接触である。バルト語が非常に古風な性質を保っていることから結論できることは、この言語を話す民族がかなり安定して居住していた地域が、移住民の大きな流れの途中にあったわけではないということである。ここからほぼ明らかなことに、バルト人が古くから定住していた場所は、当初は森林に覆われていて、家畜を飼う人々が遊牧生活を営むには不向きな地域、すなわち南東方向にはプリピャチ川上流の湿地帯と北西方向にはバルト海の間の地域であったと考えられ、これは今日彼らがいるところとも一致する。

スラブ語

5.35 スラブ語は、今日では数多くの言語を擁し、かなり広い領域を占めているが、これが印欧語の一方言から分岐したのは比較的最近のことであって、紀元直後の時代には今日のウクライナに当たる地域の北西部で話されていたと考えられる。この地域はバルト人がいたと考えられる地域にかなり近いことになるが、遊牧民との接触もっと盛んであった。例えば「百」を表す語のような一連の借用語 (67) から、スラブ人がイラン人、その中でも恐らくスキュタイ人と接触を持っていたことが伺える。上【＝5.16】で述べたように、スキュタイ人は紀元前数世紀に黒海北部に定住していたのである。しかし、スラブ人に対し紀元後の最初の数世紀に文化的衝撃を与え、拡大の機運を高めたのは、特に、スカンディナヴィアから到来し、ヴィスワ川下流から南東方向に影響を及ぼしていたゲルマン人である、ゴート人との接触であったと思われる。ロシア語の khleb「パン」あるいは gorod, -grad「町」がそれぞれゴート語の hlaifs（英語の loaf に当たる）、gards

「家、囲まれた居住地」（英語の yard）の借用語であった可能性もある[68]。さらに、ロシア語の副詞 vy が接頭辞として用いられるとき、そのアクセントの性質は非常に特殊であり[69]、これが形も意味もよく似たゴート語の ūt（英語 out）から影響を受けたのではないかとも考え得る[70]。この【ゴート人との】接触によって技術革新が生まれ、恐らくこのために人口が急激に増大したらしく、さらに、この人口爆発のためにその後スラブ人が拡大したと考えなければならない。アジアから到来したフン族の圧力を受けて、ゴート人はイタリア、ガリア南部、ヒスパニアへと移動する。その少し後、やはりアジアから到来したアヴァール人が侵攻する過程で、スラブ人も西、及び南へと移動したと思われる。スラブ人は、恐らく武力ではなく繁殖力の点で最終的には優位を占めることとなって、バルカン半島に広がり、ビザンツと衝突する。彼らはまたドナウ川流域を通って西へと向かい、チロルにまで侵入し、今日のドイツの大部分を占領した。エルベ川を越えて、ハノーファーのあたりには１７世紀までスラブ人の小部族ポラーブ人が残ることになる。この部族名は po-「～沿い」と -lab-「エルベ川」からできており、後ろの要素は【ラテン名】Albis からスラブ語で流音の先取りが行われて *Labis を経て得られる形であり、チェコ語の Labe にあたる。

5.36 このスラブ人の圧力に歯止めをかけ、スラブ人の占拠する地域のゲルマン化を押し進める発端となったのはフランク王国である。その後 Drang nach Osten と呼ばれることになるこの東への圧力は、第二次世界大戦の間に一時はスターリングラード手前にまで到達することになる。９世紀の終わり頃、西シベリアからやってきたハンガリー人がドナウ平原に腰を落ちつける。彼らはここでドイツ人と衝突する。ドイツ人はウィーンまで東に歩を進め、古代のオストマルク、後のオーストリアを形成していたのである。ロマンス語を話す羊飼いがカルパチア山脈を下ってモルダヴィアとワラキアに住み着いたため、スラブ世界は完全に分断されてしまった。南スラブ人には西から東に、スロベニア人、クロアチア人、セルビア人、マケドニア人、もっと東に古代モエシアのスラブ化したブルガリア人、他方、東スラブ人にはロシア人、ウクライナ人、及び西スラブ人にはポーランド人、ソルブ人、チェコ人とスロバキア人がいる。

5.37 ９世紀になって、テッサロニーキ（サロニカ）出身のキュリロス（キリール）とその兄メトディオス（メトディー）がスラブ人のキリスト教化の任務を帯びた。彼らは聖書を翻訳するために、初めグラゴール文字と呼ばれる小文字を作り、次いでギリシア文字の大文字に手を加えてもう一つの文字を作った。このいわゆるキリール文字は最終的にマケドニア人、セルビア人、ブルガリア人、及び東スラブ人に用いられるようになる。そこで用いられた言語は古代スラブ語(vieux-slave)【＝古代教会スラブ語 (G Altkirchenslavisch)】と呼ばれ、スラブ語を話す様々の民族に理解可能であった。彼らの話しことばはかなり似かよっていたのである。領域の西側の部分、すなわちポーランドからクロアチアまでの部分は西側からキリスト教を受け入れたため、ラテン文字を用いるようになった。

5.38 バルト語と比べてスラブ語の特徴の一つに、少し遅れてフランス語でも生じた次のような現

象がある。音節の中で母音に続く要素をすべて、段階的に脱落させたのである。フランス語の fait【[fɛ] "fact"】のような語はこの過程を例示するのにうってつけである。このスペリングは、/f/, /a/, /i/, /t/という4つの音素を持ち、/a/を音節核とする、かつて行われた発音を再現している。12世紀と15世紀の間に/a/の発音に影響を与えて、/i/が消え去った。次の語が母音で始まる場合を除いて、/t/も消え去った。《C'est un fait》【"This is a fact"】と言う時に fait を [fɛt] と発音することがあるように、この末尾の子音は後代に復活することもある。

5.39 スラブ語は9世紀より前にこれと同じような過程をたどり、末尾の子音は脱落し、二重母音は単母音となった。【音節末の】n あるいは m の前にある母音は鼻音化し、これらの鼻子音は脱落した。例えば *pontis「道」は *pōti を経て、後にロシア語の put´を生んでいる。【音節末の】-al- あるいは -ar- は -la- や -ra- になったり、あるいはロシア語【等の東スラブ語】のように -ala- や -ara- となった。これによって該当の音節が母音に終わるようになる。エルベ川を表す Albis がチェコ語で Labe となることについては上【5.35】で触れた。他方、古代のゴート語の *gardas は *gradŭ や *garadŭ の形を取り、古代スラブ語の gradŭ、古いロシア語の書記法の gorodŭ にまで至る。両者とも「【城壁に囲まれた】町」の意である。スラブ語では、音節の末尾の部分を脱落させるという過程がさらに進んで、長母音が短縮化され、その調音的性質の一部が先行子音に先取りされることになった。bī のような音節では [b] が「湿音化」(mouiller)【＝硬口蓋化、軟化】し、ほぼ [bʲi] のような発音となった。bū では [u] の唇の丸めが先行子音に及び、[bʷ] となって、母音自身は円唇性を失った後舌母音となった。この母音はロシア語のローマ字転写では y と記される。

5.40 母音の後の要素を脱落させる過程が終了すると、最も頻繁に用いられる母音の発音が弛緩 (négliger) しやすくなる。このようなことが行われても理解を妨げることはない。子音に続くべき母音が聞こえない場合、聞き手は子音の後のこの母音を無意識のうちに補って聞くからである。フランス語では fait が [fɛ] に、faite が [fɛ-tə] になった時点で、後者の末尾の [ə] は省略され得た。faite を [fɛt] と発音しても、fait との区別はきちんと保たれたし、また今日でもパリの住人の多くは faite の e が発音されると思いこんでいる。こうして「無音の e」が生じたのであった。

5.41 スラブ語にはいわば「無音の e」が二つある。これらはイェル (jers) [71] と呼ばれ、その一方【ь】は短い i を、もう一方【ъ】は短い u を表していた。これらは両者ともその後消滅してしまったが、前者はその先行子音を「湿音化」した。後者は先行子音に [u] の響きを付け加える。これは l の場合に顕著であって、英語の battle の場合と同様に「脂っこく」(gras)【＝唇軟口蓋化して】発音される。フランス語で例えば brebis【[bʁəbi]「雌羊」】あるいは je me demande [72]【[ʒəmdəmãd]「私は自問する」】の下線部の e が無音ではなく [ə] と発音されるように、子音の過度の連続を避けるためにある種の「無音の e」が発音される[73]が、これと同じようにスラブ語でも発音が容易になるようなイェルは保持された。このような場合、ロシア語では元々の ĭ は e で、元々の ŭ は o で現れる。例えば、古い*atīko- [74]「お父ちゃん」はロシア語で [at´ets]、正書法に従えば otec となる[75]。また、OCS krŭvī (Lat. cruor 参照)[76]にあたるロシア語の形は krov´「血」である。しかし

ながら、母音の質は次の子音の「音色」(coloration) に影響を受けることもあった。鷲を意味する語を例に取ってみよう。出発点の形としては *arĭlŭ [77]が想定され得る。母音の音色は先行子音に移り、その母音自体は中間的で最大限に弱化した音色となった。その結果は *arʲəlᵘə [78]である。ここから末尾の母音が脱落して *arʲəlᵘ となる。その前の母音【ə】は続く子音の音色に影響を受け、e ではなく o で現れることになり、こうして arʲolᵘ、正書法に従えば orël が得られる。これと似たような現象は英語にも見られ、例えば silk という語は、l が [u] の響きを持っている【＝唇軟口蓋化した [ɫ]】ため [suk] のように聞こえることもある。milk にあたる語は古英語で mioluc [79]と記されることもあったが、o と u は l の【唇軟口蓋化した】響きを示すためだけのものであった。

その他のサタム諸語

5.42 トラキア語やフリギア語といったバルカンや小アジアの一連の言語については、ギリシア語によるその名称と若干の固有名詞を除いて、ほとんど何も知られていない。印欧語の再建を行う際にこれらの言語を資料として用いるのは困難である。今日のルーマニアにあたる地においてかつて話されていたダキア人やゲタ人の言語についても同じことが言える。

ギリシア語

5.43 言い伝えによれば、ギリシアは北から相次ぐ波となって到来した諸民族によって占領されたことになっている。アカイア人が紀元前二千年頃到来し、その約八百年後にドーリア人が出現したことについては上【3.13】で触れた。この言語には、ゲルマン語やアルメニア語に想定されるのと同じタイプの子音推移が行われた痕跡が見られるが、この痕跡を残したのは印欧語を話す占領者のより古い波だったとみなされることもある。例えば Kórinthos「コリント」の末尾部分には、本来的な無帯気音を持つ一般的な-nto-ではなく、帯気音を持つ-ntho-が現れており、この現象の原因がこのような子音推移に求められ得るのである。

5.44 ギリシア語は hekatón [80]「百」の k や (gi)gnṓskō「私は知る」【Cf. 5.5ff.】が示すようにケントゥム語である。*kʷ のタイプの古い唇軟口蓋音は、ケントゥム語において普通そうであるように、古い時代に保たれていた。hekatón という形態から、ギリシア語とインド・イラン諸語が近い関係にあることがわかる。古い音節を成す鼻音が a に変化しているのである。この「百」を表す語は本来的に「十」を表す語から接尾辞 -tó- を加えることによって派生したものである。「十」を表す語は*dekm̥ と再建される。したがって「百」は初め *dekm̥tóm であり、無アクセント母音が脱落して *dkm̥tóm、さらに *km̥tóm となった。m̥ というのは音節を成す [m] のことで、早口で d'arpès ce que me disent...【「... が語るところでは」】と言ったときの発音 [dapʀɛskm̥diz] [81] に聞かれるものに近い。その他の言語では鼻音が保たれ、その前に母音が挿入された [82]。Lat. centum では e が、Br. kant では a が、Goth. hund では u が、Toch. kənte では ə [83] が、Lith. šim̃tas では i

がそれぞれ現れている。リトアニア語の形態では本来的な m が保存されており、その他のように後続する t に同化して n となっていない。ギリシア語とサンスクリットでは鼻音も鼻音性も失われ、それぞれ he-kAtón 及び çAtám となっている。

5.45 古代のギリシア語は印欧祖語にあったことが確実な三系列の閉鎖音を保存している。すなわち下記のごとくである。

p	t	k
b	d	g
p^h	t^h	k^h

5.46 古代世界が終わった後、そして現代ギリシア語でも帯気音は摩擦音に転じている。p^h は [f] に、t^h は E thin の th に類する [þ] に、k^h は G Ach-laut あるいは Sp. jota に類する [x] にそれぞれ変化した。古典ギリシア語からの借用語において、フランス人は例えば phare の古い [p^h] を [f] としたが、例えば tome と thèse、arcadien と archéologie におけるように、t と th、c (k) と ch (kh) を発音上区別していない。このような帯気音を摩擦音とする発音はギリシアにおいてかなり早期に現れたと考えられる。例えば、theós「神」はラコニアの碑文において sio という形で現れる。しかし、アテーナイで規則的な摩擦音としての発音が現れるのは、紀元後 3 世紀になってからである。Gk. élephās, eléphantos からの借用語はラテン語で常に ph と書かれ、f が書かれることはない。しかしながら、ローランの olifant【象牙の角笛】や Goth. ulbandus（ロマンス語から借用されたが、奇妙なことに別な風変わりな動物であるらくだの意味になっている）によって、日常的には摩擦音で発音されていたことがわかる。ol-, ul-が現れているのは、Gk. elaíwā からの借用語 Lat. olīva「オリーヴ」にも見られるように、借用語の el-がラテン語で規則的な発達を遂げた結果である[84]。Goth. -b- は、スペイン語にも現れるような摩擦音の b【=[β]】として発音されるが、これは母音間の f【両唇音の[ϕ]】から規則的に生じたものである。

ホメーロスのデータ

5.47 つい最近に至るまで、ギリシア語は紀元前 6 世紀以来話されてきた諸言語を写した碑文や文献によって知られていた。より古風な一部の形が、口伝によって知られており、その穴は作詩法 (métrique) から得られるデータで補われる。これがホメーロスの詩のケースであり、語彙と文法の点では紀元前 8 世紀にまで遡り得る形態が伝えられている。音の面に関して言えば、そのテキストが提示するのはより後代の状態である。しかし、作詩法を利用することで部分的に古い形態を再構成することができる。そのようなケースの一つに Gk. ánax がある。周知のごとく、ギリシア語ではラテン語と同様に、詩行は長い音節と短い音節によって決められた繰り返しから構成されている。長い音節というのは、Lat. dōnum, Gk. dôron「贈り物」の第一音節のように、長い母音を持っている場合か、あるいは Lat. mentum「顎」、Gk. ánthos「花」の両方の音節のように、子音に終わっている場合である。詩行の中で ánthos の後に母音があれば (【例えば】ánthos o...)、s は

その母音と一緒に発音され、その【第二】音節は-tho-となって短く扱われる。さて、Gk. ánax「君主」に話を移すと、これは人名 Astuánax [85] にも現れており、ástu が「都市」であるからこの人名の原義は「都市の支配者」ということである。ホメーロスのテキストの中で、この語の前に-tos に終わる形容詞があれば、後者の末尾の s は ánax の初頭の a-とリエゾンし、-tos という音節は s を失って短く扱われるように期待される。ところが現実はそうではない。あたかも ánax が子音にはじまっているかのように、-tos は長音節として扱われている。実際、他の根拠からこの語が古くは wánax であったことが知られるのである [86]。

ギリシア文字

5.48 ギリシア語はすべてよく知られたアルファベットで記されており、これがその後生まれたすべてのアルファベットの源である。アルファベットという名称はその初めの二つの文字、アルファとベータに由来し、【一音一文字の】アルファベットとしては不完全なフェニキアの音節文字に巧みな変更を加えて作り上げられた。事実、聡明にもフェニキア人自身も認めているように、フェニキア文字の元となったのは恐らくメソポタミアの文字であるが、フェニキア人にとってその元の文字は自分達のセム語を記すにはあまり適当でなかったのである。実際、その文字には表意文字の他に音節に相当する記号があり、それは例えば ka と ku を表す記号には何の共通点もないという類のものである。一方セム語では、語の基本的意味を表しているのは子音群であって、母音は変化したり派生したりする際に変わる。例えば、アラビア語で「彼は書いた」は kataba であるのに対して、「書かれた」は ma-ktūb であって、接頭辞 ma-が加わり、子音群 k t b は同じだが、母音は全く異なっている。これら二つの形態の五つの音節を全く異なる記号を用いて表記するよりも、母音を記さずにこれらをそれぞれ k-t-b、m-k-t-b と書いて、これらが同じ語であることを明示するほうが、フェニキア人には好ましく思われた。そうして彼らは22の記号から成り、母音の質を問わない音節文字を確立したのである。これによって、例えば k にあたる文字は [ka] [ku] [ki] 及び後続母音のない [k] をも表すこととなった。各々の記号には、それが表す子音からはじまる名前が付いていた。文字表の最初の記号は [ʔalef] で、この言語では通常の音素である声門閉鎖音/ʔ/を表していた。6番目の記号は wau という名で、子音/w/を表し、10番目は yod で子音/y/を表していた。ギリシア人は [ʔalef] を [alpha] として受け入れ、自分達の言語にはない [ʔ] は発音できない [87] ため、当然のことだが、これに対応する記号は、この文字を表す alpha という語の初めの音素である母音の/a/を表すようになった。wau は wánax の/w/にも、phúlax「見張り」の/u/にも用いられ、/u/は後にアテーナイにおいてフランス語の u【=[y]】となった。wau の初期の形は後に区別されるようになり、母音のときはＹ、音節を成さない [w] のときはＦ[88]と書き分けられた。Ｙの縦の棒の部分が失われてＶとなり、これがラテン語では svs【sūs】「豚」の母音も、versus「～に向かって」の初頭の子音も表すようになった。【母音としての】u と【子音としての】v とが書き分けられるようになったのは、16世紀、スペインの地においてからであった。

ミュケーナイ語

5.49 ギリシア語に関するデータには最近の発見によって革命的な出来事が起こった。イングランド陸軍在任中に暗号解読を担当していた Ventris という名の連合王国人が、ギリシア学者 Chadwick と協力して、その技能を線文字Bと呼ばれる文字の解読に応用したのである。クレタ島の、非常に古くギリシア語が話されていたところに、異なる二種類の文字で刻まれた碑文があった。これらはそれぞれ恣意的にAとBと呼ばれており、明らかに音節文字である。ある文字が音節文字であることは、その文字の総数によってわかる。表意文字の場合には、その総数は何千という数になる。アルファベットではその総数は二三十である。他方、音節文字の場合には、個々の文字の総数はこれらの中間となる。このように、ある言語についての知識がなくとも、そこで用いられる文字が表意文字なのか、アルファベットなのか、音節文字なのかを判断することが可能なのである。Ventris は線文字Bで書かれた言語はギリシア語であると仮定し、この仮説の検証を行った。

5.50 音節文字の数を減らすために、ある種の音韻論的区別、例えば/pa/と/ba/の区別を考慮しないという手段が取られることがしばしばある。日本語ではこのような場合に付加記号を用いている。例えば ha を表す文字【＝は、ハ】があり、これはかつては/pa/であったのだが、これにトレマ【¨】に似た付加記号【=゛】を添えれば ba【=ば、バ】となり、上に小さな丸を加えれば pa【=ぱ、パ】となる。後者は pan【パン】のような外来語に現れる。音節文字 B の場合には無声音と有声音とが区別されず、そのため多くの場合に様々な読み方の可能性がある。しかし、ついに努力が実って、Ventris の解読の結果明らかとなったことに、ミュケーナイ語とも呼ばれる紀元前14世紀のギリシア語は、古典ギリシア語とは違って、k^w の類の古い唇軟口蓋音を唇音 (p の類) や舌尖音 (t の類) にはまだ縮減していなかったのである。この現象は、Lat. līquī「私は残した」に対しての Gk. leípō「私は残す」[89] や、Lat. quis に対してのギリシア語 tís【「何が」】[90] に観察される。ミュケーナイ語では *-k^wo の reflex は古典ギリシア語とは違って古い -po- とは合一していなかったのである[91]。

5.51 周知のように、古代にギリシア人が入植していた場所には、クレタ島、小アジアの西岸のイオーニア、マグナ・グラエキア（大ギリシア）と呼ばれたイタリア半島南部とシチリア島、プロヴァンスとラングドックの沿岸地域、特にマッシリア（現マルセイユ）、ニカイア（現ニース）、アンティポリス（原名 Antípolis は「(ニースの）目の前の町」の意、現アンティーブ）、アガテー（原名 Agathé は「良い女性」の意、現アグド）の諸地域がある。ギリシア文化が地中海世界に、さらにはそれが広がって西欧文明に、また、ビザンチンを介して東ヨーロッパにも及ぼした、決定的な役割についてここで立ち戻っても仕方がない。今日ギリシアで話されているのは、古代にアテーナイから定着しはじめた共通語のコイネーが発達を遂げた言語である。今日に至るまで、古典的な形に近い katharévousa「洗練語」と、話されている現実に近い démotique すなわち民衆語という二つの規範の間でゆれがある。

イタリック諸語

5.52 印欧語の一つの枝を成すイタリック諸語は長い間論争の対象となってきた。しかしながら、一部の研究者の見解に従えば、イタリア中部において古く話されていた主な印欧系諸言語が互いによく似ているのは、もともとから特別なグループを成していたからではなく、この半島でこれらの言語が接触したことに起因するとされる。今日では言語接触の重要性が非常によく認識されているため、この仮説が故意に退けられることはなくなっている。しかし、これらの言語に共通する音的特徴を、ギリシア語と同様な、単純無声音と有声音及び無声帯気音という三系列を持つ体系から説明することも不可能なわけではない。これに従えば、このような体系ができあがったのは、紀元前第三千年紀に、印欧語を話す諸民族の連続体 (continuum) となっていた中部ヨーロッパのどこかであると想定されよう。この連続体の一部が南東に向かい、アカイア人となった。残りの人々は二つの波となって南西へ向かい、イタリック語の二つの層を成した。その第一の波は、恐らく、紀元前第二千年紀の中程にポー川流域の湿原に腰を落ちつけた人々、すなわちテラマーレの住人であったと思われる。後に半島の中で、エトルリア人の領地の先に登場し、ラテン人という名で知られることとなるのは彼らのことである。第二の波は紀元前第一千年紀の初めにいわゆるヴィラノーヴァ文明をもたらした人々で、彼らは次第にアペニン山脈沿いを南下し、オスク・ウンブリア人と呼ばれる民族を構成することとなる。原著59ページの地図【原図７】を参照されたい。

5.53 ラテン語もオスク語及びウンブリア語もケントゥム語であって、初期には *kʷ のごとき唇軟口蓋音が保たれていた。だが、例えば疑問詞の quis【「何が」】のようにラテン語がこれらの音を保存したのに対し、対応する pis に見られるようにオスク語とウンブリア語はこれらを唇音に変えている。両者の違いは目につきやすいため、重要視される傾向にあった。しかし、この語族に属す様々な言語の歴史が示すところでは、*kʷ から [p] への変化は例外的では全くなく、以下のような言語にこの現象が現れている。Lat. aqua に Rum. apa が、Lat. quattuor に Sard. battoro がそれぞれ対応しており、*leikʷō が Gk. leípō「私は残す」となったのはミュケーナイ時代の後であったはずである【5.50参照】。ゲルマン語とケルト語の場合については後述する。

5.54 オスク語とウンブリア語は消滅し、ラテン語に吸収されてしまったが、その若干の名残はカンパニア地方の方言にとどめられている。

ラテン語

5.55 ラテン語が当初話されていたのは、ローマとその南方及び南東に広がるラティウムという名の州であった。この言語はオスク・ウンブリアに類することば、特にサビニ語と直接に接触していて、これらの言語から多くの形態を受け入れた。サビニ人の農民とローマ人の農民とが常に接触を保っていたことは明らかであり、「牛」を意味する語は【Lat.】bōs であって、その語頭には

ラテン語ではなくオスク・ウンブリア語に期待される子音が現れている。ラテン語での「正則的な」形態は *vōs となるはずなのである[92]。vōs「あなたたち」という同音異義語があったことも、この借用が行われる潜在的原因であったのかもしれない。例はこれにとどまらない。「狼」の意で再建される *wl̥ kʷos に対応するのは Lat. lopus であるが、ここには p が現れており、ラテン語に期待される形とは異なる。この言語では *kʷ は保存され【qu と綴られ】るはずなのである。

5.56 ラテン語は幾分か孤立しているように思える。【ローマの】北方40キロメートルのところにファレリイという名の町があり、そこではファリスキ語という言語が話されていた。確かにこの言語はラテン語にかなり近いのだが、母音間でラテン語が-b-となるところで-f-が現れる[93]などオスク・ウンブリア語を想起させるような特徴をも持っている。伝説の伝えるところでは、この町を建築したのは、後に自分達の名を冠したシチリア島に腰を落ちつけることになる、シチリア人であった。この点について残された文献の記述を信じるならば、シチリア語はかなりラテン語に似ていたことになる。

ラテン・アルファベット

5.57 ラテン語を記したアルファベットは、南イタリアのドーリア人に用いられていた形でのギリシア・アルファベットから派生したものである。例えば、Hはアテーナイの場合のように母音【[ε:]】ではなく、いわゆる「気音」【[h]】たる子音を表した。ギリシア文字の三番目の文字【Γ】は [g] の音であるのに、ラテン語では【Γから作られた】Cが無声【の [k]】となったのは、エトルリア語の影響と考えられている。その結果、Cに手を加えたGという新たな文字を作り出す必要が生じたのである。だが、【C [k] と】重複するKが間引かれることにはならなかった。Qには常にVが後続して用いられるが、この文字が保持された要因の一つには、例えば一音節の QVI「何が」が同じ語の与格で二音節の CUI と区別され得るということもあったろう。伝統的な21文字に、ギリシア語からの借用語を表記する必要性から、YとZが付け加えられた。古代においては、文字の上で [j]（フランス語の yole の y）と [i]、[w] と [u] の区別は行われなかった。ラテン・アルファベットが他の言語、例えばラテン語から発達したロマンス諸語、あるいはケルト語やゲルマン語のような他のグループにも用いられるようになって、手直しがいくらか必要になったのである。例えばゲルマン語ではVと書かれた母音 [u] と区別するために、音節を成さない [w] をVを重ねて表記した。また、cがス一音として発音される場合を表記するために、小さなz [zɛd] をその下に書くことが考案された。スペイン語でこの出っ張りが zedilla, cedilla【原意は「小さなz」】と呼ばれているのはこのためである。母音と子音の区別を行うためにiとj、uとvという異なる書体を各々別々に用いることが考案されたのは、近代が始まってからに過ぎない。これより以前には、uとvとを区別するために huile と vile のように無音の h が添えられていた。同様に、ニワトコの一種を表す hièble はラテン語の ebulum に起因するが、jèble と読まれることのないように h が加えられている。後者であれば *ièble と綴られるのである。

ロマンス諸語

5.58 周知のように、ラテン語はローマ帝国の様々な部分で、地域の住民に取り入れられ、場所によって異なる発達をした。しかし、教養層は古典の規範を守り続けていた。ガリア北部において地域語で文章が綴られ始まるのは９世紀からのことである。フランク王政によって、宗教的儀式において古典ラテン語を復活させようとする試みが行われたが、民衆はすでに牧師の言うことが理解できず、結局、説教は俗語で行うという規律が生まれ、【ラテン語と彼らのことばとは】言語的にかけ離れていることが認識されたのであった。

5.59 現代の様々なロマンス語をここで紹介することはできないが、それらの今日の状況はそれらの印欧語としての性質を汚しているというわけではないことを忘れてはならない。西から東へポルトガル語、スペイン語、フランス語、イタリア語、ルーマニア語という五つの国家の公用語が、初めからそのような地位、すなわちローマ文化の数少ない正当なる代表者としての地位を誇っていたわけではないということだけは指摘しておかねばならない。若干の地域的方言を文語の地位に高めようとする試みが何度も行われている。フランス語と、【南フランスの】オック語から発達し、北の住人の政治的支配によって虐げられたピカルディー語とが長い間共存してきたことや、イベリア半島ではレコンキスタ運動の各々の段階に対応して、ガリシア・ポルトガル語、カスティリア語、カタロニア語が生じたこと、イタリアでは長い間【シチリア方言とトスカーナ方言の間で】文語の規範が揺れており、結局はダンテの権威によってフィレンツェ【＝トスカーナ】方言が優位となったことなどを思い起こして戴きたい。バルカン半島のロマンス語には、少なくとも三つの形態、すなわちルーマニア【＝ダキア】のダコ・ルーマニア語 (le daco-roumain)、テッサロニーキ北方のメグレノ・ルーマニア語 (le migléno-roumain)、マケドニアのア・ルーマニア語 (l'aroumain) があり、これ以外にもイストラ半島にまで北上する痕跡がある。ダコ・ルーマニア語が、ローマ軍によってダキアにもたらされ、カルパティア山脈内に保存されたラテン語の成れの果てなのか、あるいは南と西から到来したワラキアの遊牧民が入植したことから生まれたのかは議論が分かれるところである。スラブ語及びゲルマン語と接しているフリウリ語やレト・ロマンス語[94]は、その保存に関してと同じく、その起源に関しても大きな問題を呈している。地方的方言は、特に政治的あるいは文化的立場を獲得できない限り、現代国家の力によってゆくゆくは消滅してしまうものなのであろう。

ゲルマン諸語

5.60　まず初めに、言語学や歴史に関して用いられる際、ゲルマンというのはドイツとは全く異なる意味であるという点を指摘しておきたい。英語、オランダ語、スカンディナヴィアの諸言語は歴（れっき）としたゲルマン語である。

子音推移

5.61 ゲルマン諸語がまとまりを成すことについては疑問の余地はない。これらが文証されるのは比較的遅く、紀元後初期の数世紀からのことであるが、そのとき以来、主として子音体系が受けた推移という事実によって、明確に特徴付けられている。この子音推移の結果生まれた相違を例示するには、若干の英語の語とそのギリシア語とラテン語での対応語を比べてみればよい。father「父親」の f は【Gk.】patḗr,【Lat.】pater の p に、heart「心 (臓)」の h は kardía, cordis (属格) [95] の k や c に、tooth「歯」の t- と -th は属格形 (o)dóntos, dentis [96] の d- と -t- に、know「知る」の【かつて発音されていた】k- には古典語の語根 -gnō- の g [97] に、また、what「何」の wh- と -t は Lat. quod の qu- と -d にそれぞれ対応している。

5.62 ドイツ語は新たな推移を経験し、その結果 Herz (heart), Zahn (tooth), was (what) に見られるように、特に歯擦音の z と s が英語の t に対応するようになった【5.76参照】。

5.63 ゲルマン子音推移と同様の現象は他の言語、特に既に【5.24】概略したようにアルメニア語にも現れているが、この変化の起源と発達については述べておく価値がある。すべては、あたかも声門の運動の開始が遅れるかのように生じる。つまり、声門を構成する声帯が接近し振動を開始するのが、予想されるよりも遅れるのである。[ta] を例に取ると、声、すなわち声帯 [98] の振動によって特徴付けられる母音が聞こえるのが、F tas の場合のように [t] が開放された直後ではなく、一秒の何分の一か母音が発されるのが遅れ、その間に呼気が【声門を】通過するのである [99]。これは E tar の発音において行われることであり、この語の発音は [tʰa :]【∵英音】と記されることであろう。しかし、英語におけるこの【気音の】時間【=VOT】は非常に短い。だが、デンマーク語ではこの「気音」が特徴的で、tager という語は [thɑʔʁ] [100] と記される。【他方】[da] の場合には、【声帯の】振動が子音の初めからすぐ開始されるとみなされる。F dard【[daʁ]】と tard【[taʁ]】の差異の本質を成しているのは【初頭の子音の】まさにこの振動の有無である。E dart においてはこの振動の開始は若干遅れているとはいえ、その [d] は部分的には有声のままである。Dan. dale においては、声帯の振動が始まるのが母音と同時となり、/d/は [d̥] と記される弱まった [t] のように聞こえる。それでも dale [d̥a : le]「下がる」と tale [tha : lə]「話す」との区別は保たれており、両者の弁別は主として気音の有無によってなされている。

5.64 この様子は、あたかも現代デンマーク語において古いゲルマン祖語の子音推移がもう一度行われようとしているかのようである [原註1]。このような子音推移は、当然ながら、t と d ばかりでなく、k と g についても、p と b についても生じた。最後の音は恐らく印欧祖語には存在していなかった音で、他言語からの借用語以外にはほとんど現れない。帯気音はギリシア語に見られるように [101] 時を経る間に弛緩して摩擦音となるものである。[th] は E thin の th のような [θ] あるいは [þ] となる。同様に *p は [ph]、次いで両唇摩擦音の [ɸ] を経て、最終的に [f] へと、*k は [kh]、後に [χ]、すなわち G ach の ch あるいは Sp. jota の音へと、また *kʷ は同じように [χʷ]、すなわち Sp. Juan の初頭に聞かれるのと似た音へと、それぞれ転じる。語頭において [χ] や [χʷ] の

音は弱まり、ついには聞こえるのは、「気音」と呼ばれる、開いた声門での呼気の摩擦音となったと思われる。*b *d *g *gʷ に関しては、声が失われた後に強まって [p] [t] [k] [kʷ] となった。

5.65 子音推移が行われたときに、「有声帯気音」と呼ばれ*bʰ *dʰ *gʰ *gʷʰ と記される子音が正確にどのような音であったのかはよくわかっていない。この推移が終了した後には、これらの音はその調音の初めから終わりまで声を伴っていたらしく、また少なくとも母音間では口腔内で完全な閉鎖は行われていなかったと思われる。このような【有声摩擦】音はしばしばギリシア文字 [β δ γ γʷ] (102) で表される。これらの音は、特に力を込めて発音した場合や、鼻音の後では、硬化して [b d g gʷ] となることもある。鼻音の場合には口腔内で閉鎖が行われるものだからである。

Verner の法則

5.66 古いアクセントが語の第一音節に固定したアクセントに置き換えられる以前の段階で、*p *t *k *kʷ に起因する無声摩擦音 [ϕθχχʷ] 及びス一音 *s は、これらが語頭にない場合でその直前にアクセントがない場合に、有声化してそれぞれ [β δ γ γʷ z] となった。したがって、これらのうち前の四者は *bʰ *dʰ *gʰ *gʷʰ のレフレクスと合一したのである。この結果、*kṃtóm「百」はまず [χunθám] となった。語頭の [χ-] は無声のままであったが、語中の [-θ-] はアクセントの直後ではなく直前にあったため有声化して [-δ-] となり、[-n-] と接触していたため硬化して [-d-] となった。アクセントが第一音節に移ると語尾の [-am] は脱落した。語頭の [χ-] は普通 [h-] となる。その結果生まれるのは hund であって、これはこのままの形で、あるいは hundred (103) の構成部分として実証される。この一連の変化の定式化を行ったのはデンマーク人 Karl Verner であり、そのためこれは Verner の法則の名で知られている。

5.67 ゲルマン祖語に想定され、そして実際にゴート語に現れている子音体系は、機能の点で驚くほど現代スペイン語のそれに酷似している。以下の表に記したのは、各々のケースにおいてゴート語の語とスペイン語の語であり、これらの語頭の子音はスペリング上互いに異なっているが、同じ音を表している。

[f]	fadar	[θ]	þaurp	[χ][h]	heþjo	[χʷ][hw]	hweila
	fuego		cerro		jefe*		juego*
[β][b]	badi	[δ][d]	daigs	[γ][g]	galwo	[w][γʷ][gʷ]	warmjan
	beso		dedo		gana		hueso
[p]	paida	[t]	taihun	[k]	kara	[kʷ]	qino
	padre		tal		casa	[kw]	cuanto

* もっぱらアメリカ大陸で用いられる。

－ww-のレフレクス

5.68 歴史の黎明期においてゲルマン人は今日のデンマーク、スウェーデン南部、及びそこからす

ぐ近くの北ドイツの一部にいたものと考えられる。スカンディナヴィア半島にはその言語の-ww-を硬化して-ggw-と発音する人々が住んでいた。fiable という形容詞が新しく作られるまでフランス語にはそのような【=「信頼できる」という意味の】語がなかったのだが、この意味を表す語は、長い間スウェーデン南部に住んでいた諸民族の言語では Goth. triggws、OIs. tryggr、Sw. trygg、Dan. tryg となっている。他方、デンマーク、シュレースヴィヒ、ホルシュタイン、メクレンブルクに居住していた民族の末裔の言語には g(g) が現れない。例えば、OFr. triuwe、E true、G treu のようにである。対応の女性形である Goth. triggwa、【OH】G triuwa、後の Treue は「休戦」(trêve) の意味でロマンス語に借用されている。イタリアには東ゴート人が、ヒスパニアには西ゴート人がいたため、イタリア語とスペイン語にはゴート語の形が採用されており、g を持つ tregua となっている。フランス語にはフランク人の言語から g のない triuwa が採用されている。古いゲルマン語の二重母音 iu では、古フランス語の二重母音 ie と全く同じように、i にアクセントがあり、このどちらの言語でも u と e はあまり明瞭に発音されなかった。そのため triuwa が triewa の形で受け入れられ、そこから規則的にフランス語の trêve [104] ができたのである。

東ゲルマン人

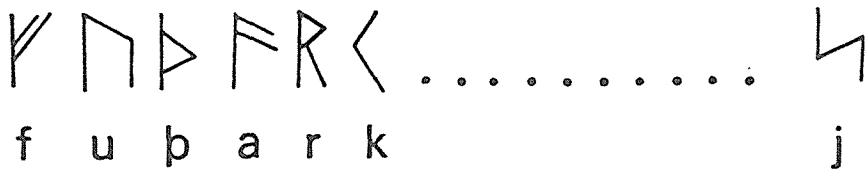
5.69 スウェーデン南部にいて、-ww- を -ggw- に変えたゲルマン人の中には、バルト海を渡り、南及び南東を目指した人々もいた。彼らの一部であるゴート人は、バルト海中央部のゴトランド島から出たらしい。すでに彼らの足跡はヴィスワ川河口付近と、その後今日のウクライナに確認されており、彼らはそこでスラブ人の祖先を服従させた後、中部ヨーロッパを横切り、最終的にイタリア、ガリア南部及びヒスパニアに居を定めた。ブルグンド人はボルンホルム島からやって来た。この島は古くはブルグンドルホルム (Burgundrholm)【「ブルグンドの島」】と呼ばれており、今日では政治的にデンマーク領であるが、物理的にはスウェーデンの一部である。彼らはライン川中流域に至り、その地に、そして後には南西に進んでブルゴーニュからサヴォワにかけての場所に王国を建設することとなるが、この王国はしばらくしてフランク王国に併合された。ゴート人とブルグンド人の話していたのは、今日では死滅したいわゆる東ゲルマン語の一種であった。この言語【＝ゴート語】は主として 4 世紀に行われた新訳聖書の翻訳によって知られている。その翻訳を行ったのは Wulfila で、ゴート族が遠征を行った際、誘拐して来たカッパドキアの一族の出身であった。16世紀にフラマン人の旅行家が、当時のクリミアでまだ話されていたゴート語の方言の単語を若干指摘している。

北ゲルマン人

5.70 スウェーデンに居住していた他の人々は、その場に留まったり、あるいは海峡を渡ってデンマークを獲得することになる。言語学では彼らの言語を北ゲルマン語と呼んでおり、彼らは後にスカンディナヴィア人と呼ばれることになる。この語の中には、少々形が変わってはいるが、ス

ウェーデンの南部の地方名スコーネ【Sw. Skåne】が含まれている。彼らの言語は3世紀以来ルーン碑文の形で文証されている。最古のルーン碑文は角に刻まれたもので、今日では失われているが、ik hlewagastiz holtingaz horna tawido と再現され、「我、ホルトの子フレワガスティズ、この角を作りし」と解釈される。Hlewagastiz は hlewa-と-gastiz の二つの部分から成り、前者はギリシア語の kléo-s (< kléwo-s)「名声」[105] と対応しており、後者は E guest、G Gast にあたる。これは Lat. hostis であるが、その意味は「客」(hôte) であって敵ではない [106]。

ルーン文字



上に記したのがフサルク (futhark) と呼ばれる元々のルーン文字の初めの６つと１２番目の文字である。木の板に文字を刻み込むときに水平の線は木目と紛れてしまい、わからなくなってしまうので水平の線を用いなくなったことを考慮すれば、１、４、５、６番目の文字はラテン文字のＦ、Ａ、Ｒ、Ｃから容易に説明できる。２番目の文字はＶを逆さまにしたものであり、縦の線の部分が多くなっている。３番目の文字はラテン語の音素に対応していない。当然ながらギリシア文字のθに起因するのではないかと考えられ、これは元々は帯気音であったが、紀元後の時代が始まった頃に英語の thin の th のように発音されるようになったと考えられる。

個々のルーン文字には名前が付いており、文字名の初頭音が変われば文字の音価もそれに連れて変化した。例えば４番目の文字は後代にアサ（エイシア、les Ases) [107] と称されることになる神族の名で呼ばれていた。この語の古い単数形は [ansaz] であったはずである。北ゲルマン諸方言においては [-s-] の前で [an] が [ā] となるため [108]、この語は [āsaz] となり、４番目のルーン文字は長い間 [ā] (フランス語では an と書かれる鼻母音化した [a]) という音価を持っていた。そのため鼻母音でない [a] をどのように表記するかが問題となった。そこで登場するのが12番目のルーン文字である。この文字には一年という意味の [ja : ra] という名が付いていた。この語は *yēro- に起因し、英語の year やドイツ語の Jahr もここから生じている。上記4.25に述べたヘーラーについての第Ⅳ章原註４を参照のこと。スカンディナヴィアでは語頭の [j]（フランス語では y-で表される）が脱落してしまうため、この語は [a : ra]（デンマーク語とスウェーデン語 år）となり、したがってこの名を持つルーン文字が普通の [a] を表すのに用いられるようになったのである。

5.71 ルーン文字はイタリアに現れた数多くのアルファベットの一つに起源を持っていることは間違いなく、最近の分析によればマグナ・グラエキアのドーリア人のアルファベットに遡るとされ

る。ルーン文字は水平の線を全く用いないという点が、その南のモデルとの大きな差異である。例えばTの縦棒はそのままだが、この棒を頂点として上の線は斜めに下がっている:↑。これは、石に刻む以前に、ルーン文字を木の板に刻み込んだからだと説明されている。木の木目と直交するように縦の線を刻めば、その線はよく見えるが、水平の線は木目に紛れてしまうのである。このような板にはぶな (G Buche) が用いられたため、ドイツ語では今日でも文字のことを Buchstabe と呼んでいる。古英語では bōc がぶなのことも本のことも表したし、ゴート語では boka は文字のことで、その複数形 bokos は「本」の意味となった。

5.72 それから五百年ほど経って、当時ヴァイキングとして知られていた北ゲルマン人はノルウェーの大部分を手中にした後、ブリテン諸島と英仏海峡の沿岸部に侵攻し、アイスランド、イングランド、ノルマンディーに定住し、後にはシチリアにまで侵攻した。他方、東方ではビザンツに至るルートにルーシ国を建設した。ルーシ人 Rusĭ という名称はここに由来する。フィンランド語で Ruotsi は「スウェーデン人」の意なのである。

西ゲルマン人

5.73 -ww-を硬化させなかったゲルマン人は当初ヴェーゼル川とオーデル川の間のデンマークとドイツの沿岸部に居住していたが、何世紀かを経る間に次第に南と西に拡大した。そのため、言語学では彼らの言語を西ゲルマン語と呼んでいる。紀元前II世紀にキンブリ族とテウトニ族が行った劇的な民族移動についてはすでに【2.14】述べた。この時代からゲルマン人とケルト人はチューリンゲン付近で接触していたと考えられよう。しかし、その直後に拡大が行われた。ゲルマンのスエヴィ族は、その長アリオウィストゥスに導かれてガリアに侵攻しようとしていたところをカエサルによって行く手を阻まれた。スエヴィ族はその後ドイツ南西部のシュヴァーベン地方にその名を残している。ローマ帝国滅亡後はスエヴィ族はイベリア半島のポルトガルにあたる地域にまで到達している。北西にはゲルマン人はかなり早期にマース川河口付近に至る北海沿岸部を占領しており、ここではバタウィ人の名で呼ばれていた。

アングロ・フリジア人

5.74 北海沿岸の諸民族は後にアングロ・フリジア人と呼ばれるようになる。5世紀に大ブリテン島の南東部を占領することになるのは彼らである。言語的には硬口蓋化した [k] が [ṭ] [109] を経て [tš] となることが特徴である。例えば教会の意では Gk. kūri(a)kón「主の (館)」が借用されたが、これは英語で church となっている。他方、デンマーク語では kirke であって、ここからスコットランドの教会を表す E Kirk が出ている。G Kirche では二番目の k がドイツ語に特徴的な扱い【5.76参照】を受けている。Lat. caupō「(居酒屋の) 店主」から G kaufen「買う」[110] や E cheap ができている。この英語の語はロンドンの Cheapside と呼ばれる一画 (原義は「市場界隈」) やもちろん cheap (原義は「(よい) 取り引き」) に見られるものである。もちろん借用語以外でも同様の

取扱いがなされており、例えば chin「顎」に対応するのは同じ意味の G Kinn や、Lat. gena と同じく「頬」の意の Dan. kind、Goth. kinnus 等である。

フランク人

5.75 海の民【＝ヴァイキング】が大ブリテン島を属州化すべく出立する直前に、彼らの背後と南方にフランク人の連合が形成された。ローマ帝国の国境が後退しようとしていた 5 世紀への変わり目頃、フランク人はライン川の北部平原流域あたりにあった。その以前より彼らがその川の左岸地域に自由小作人として居住していたことは確実である。5 世紀初めから、彼らは大挙して西に移動し、占拠した土地に深く根を下ろした。彼らの中心的な都市は最初トゥルネーであったが、その後ソワソンとなり、最終的にパリとなった。フランク人の首領クロヴィスが行った偉業に、住民のローマ・カトリックへの改宗がある。地元の住民は以前から名ばかりはキリスト教徒であったが、他のゲルマン諸種族の影響から異端のアリウス派 (111) の信徒だったのである。この改宗によってガロ・ローマ人と侵略者【たるフランク人】との混交が促進されることとなったが、これは、ほぼ同じ時代にヒスパニアにおいて、新参者である西ゴート人が数世紀来それ以前の入植者と一緒に住んでいながら、その住民の各々の勢力が固有の習慣を守り通していたのとは対照的であった。フランク人はガロ・ローマ人と渾然一体となっており、かつ軍事に長けていたため、同じく帝国内に侵入した他のゲルマン諸種族よりも忽ち優位に立つことができたのである。西方では、ポアティエ近郊のヴイエ（ヴーグレ）で西ゴート人を打ち破り、南東方向には、ブルグンド人を制圧する。今日のボン近郊の、いわゆるトルビアックの戦い【5.1】で、新たに登場したアラマン人を敗退させる。アラマン人はライン川中・上流のシュヴァーベンに拠点を得て、最終的にフランク王国に併合される以前には、今日のアルザスとスイスにあたる地をも占拠した。フランク人はまたフランクフルト（マイン川の「フランク人の渡し場」の意）を越えて東方へも領土を広げ、中部ドイツ、特にフランケンを獲得する。彼らはまた後のカロリング王朝時代には、アラブ人をヒスパニアにまで押し戻し、カタロニアのレコンキスタの口火を切る。他方イタリアにも侵攻し、当地で東ゴート人の後を受けた他の西ゲルマン人であるランゴバルド（ロンバルド）人と遭遇し、シャルルマーニュ（カール大帝）はローマへ赴き西ローマ帝国の皇帝として戴冠する。北東では、海の民とともにアングリア征服に向かった別のゲルマン族であるサクソン人の残党をも取り込むこととなる。

高地ドイツ語

5.76 ドイツのゲルマン人のもとで、第二次子音推移と呼ばれる、言語の上での新たな変化が生じた。「すき」は E plough、Dan. plov に対して G Pflug、E tell、Dan. tale に対して G zahlen (112)、E two、Dan. to に対して G zwei となっているのはこの変化によってである。フランク人は、その敵たるサクソン人や大ブリテン島の移民と同様に、古い子音を保存している。このことはフラン

ス語がこの言語から取り入れた借用語によって明らかとなる。「神の審判」の意の ordalie には【O】E ordǣl、今日の ordeal と同じく -d- が保たれているが、起源が同じ G Urteil「判断」では -t- が現れている。この変化を初めに生じたのはスイスのアレマン人である。彼らは p を [pf] に、t を [ts] (z と書かれる）に「爆発」(éclater) させたばかりか、k もパリっ子には kr のように聞こえる kch（G ach の ch を伴う）と発音したのである。ランゴバルド人もこの推移を経験しており、例えば It. zanna「牙」[113] には G Zahn【歯】と同じく z が現れている。このようにして、北部平原の低地ドイツ語と、起伏に富んだ地域の高地ドイツ語とが区別される[114]。前者は、その西の変種たるオランダとベルギーのオランダ語[115]が含まれ、ベルリン及びその先にまで広がっている。後者には中部及び南ドイツ、オーストリアとスイスが属している。今日の公式のドイツ語は中部ドイツの用法を基礎に、幾分か雑多な要素を取り入れて作り上げられたものである。元々は実務用の言語として用いられていたのだが、ルターが聖書の翻訳に用いたため確固たる地位を獲得した。

フランク王国の二言語併用

5.77 フランク人と北方のガロ・ローマ人が混住していたことから、長い間二言語が併用されることとなり、その痕跡はフランス語にもドイツ語にも残されている。例えば、Lat. altus「高い」は *aut- の形でガリアに至り、これと同じ意味のゲルマン語の形態が hauh-【Cf. G hoch】であることから、後者の語頭の h- が *aut に付け加えられて【F】haut ができあがった[116]。南フランスでは Auterive[117] に見られるように語頭に h は現れないし、サヴォワでは h が綴られるものの、de Hauteville ではなく d' Hauteville[118] のように発音される。また、英語で例えば for my sake「私のために」における sake には (利益となる)「原因」(cause) 以外の意味などあったためしがなく、thing「物 (chose)」と混同することなどありえないのに、この語と起源を同じくするドイツ語の Sache は「物 (chose)」の意味で控えめに言っても Ding と同様に用いられている。これは、長い間 cause と chose が同じ単語の別形に過ぎなかったフランス語の事情に[119]、ドイツ語が倣ったためであろうと考えられるのである。あるいはまた、フランス語でもドイツ語でも「人」という語の主格が不定の人の意味で用いられている。すなわち Lat. homō に由来する F on、「男」を表す Mann と区別して用いられる G man である。英語にはこれと類似する現象はない。

5.78 アングロ・サクソン人と総称されるアングリアのゲルマン人に関して言うと、彼らの言語は、その島の先住民たるケルト人の言語から多くの影響を受けており、それはこれまで長い間考えられていたよりも根深い。その後、ノルマン人の征服【2.9参照】の後に長い【英仏】二言語併用の時期が訪れる。現代英語の辞書にはゲルマン語起源の語彙よりも、はるかに多くのフランス語あるいはラテン語起源の語彙が載せられている。ただし、前者の語彙のほうが文中での使用頻度は高い。

ケルト諸語

5.79 これまでもケルト人については何度も触れる機会があり、彼らの言語の最も際立った特徴である、語頭及び母音間での p の脱落についても言及した。印欧祖語における p の使用頻度は高いため、その消滅はかなり目を惹く現象である。西方の諸言語において、橋が作られる以前に【川を渡るのに】日常的に利用されていた浅瀬は、副詞 per「～を通って」から派生した *pr̥to- で呼ばれていた。ゲルマン語ではこの語は例えば Oxford「【原義は】牛の渡し場」にも見られる E ford や、上【5.75, 5.76】で触れたように -t を持つ G Frankfurt【の Furt】に至っている。ケルト語ではこの語は発達の規則に従い *rito- [120] となり、この中性名詞の複数形 *ritā は、多くの渡し場があったに違いないヴィエンヌ川沿いの都市リモージュの古名であった。この語はシャンボール (Chambord) の中にも見いだされる。この地名は *camborito- に由来し、元々は川の湾曲部にある浅瀬を表した [121]。これと類似した地名に Cambridge があり、これは元々同様の場所にある橋を表した。アルル (Arles) の古名 Arelate がギリシア語の pará+platús に比定されることも想起されたい【4.4参照】。中部ドイツの大森林は古くヘルキーニア（ヘルシニア）【Hercȳnia (silva)】と呼ばれていたが、ここには *perkʷus「楢、樫」[122] の古い p- の最後の痕跡たる h- が現れている [123]。対応する Goth. fairguni は語頭に規則的な f-を持ち、「山」を意味する。「山」と「森」はしばしば混同されるものである。また、*uper「上に」から -p- が脱落して*wer-が【3.11参照】、他方 *upo「下に」から同じようにして *wo- が構成される。これらはそれぞれギリシア語の hupér と hupó に対応するが、その語頭の h- が本来的な要素かどうかはよくわからない【Cf. 3.11】。

5.80 歴史の黎明期にケルト人がいたと考えられるのは、最北部を除く今日のドイツ、及びボヘミアとオーストリアであった。この地域から彼らは紀元前第一千年紀の初め頃膨張を開始し、主として西進して後のブリタニア、ガリア、ヒスパニアに達した。他方、南と東にも歩を進め、北イタリアにも、ギリシア遠征の後には小アジアにも至り、そこではガラティア人の名で知られた。

5.81 ケルト人の言語には古くは b の音がなかったため、一般に*gʷ が b に転じた。牛の呼び名である Ir. bó【[bo :]】、Br. buoc'h に見られるごとくである [124]。p が失われた時点で、その占めていた位置が空き間となり、【*gʷ ＞ b と】並行した *kʷ, *kw ＞ p という変化が可能となった。実際にこの変化は生じたのだが、それはケルト語の領域の中の一部のみにおいてであった。例えば、Lat. quattuor「４」に対応する OW petguar に p- が現れる反面、Ir. cethir [125] には c- (= [k]) が生じている。また、馬はガリアの人名に epo-として現れるが [126]、アイルランド語では ech (< ek-) [127] である。言語学ではこのようにして【*kʷ, *kw を保持する】Ｑケルト語あるいはゴイデル諸語と、【*kʷ, *kw を p に転じる】Ｐケルト語あるいはブリトン諸語とが区別され、今日において前者はアイルランドとスコットランドに、後者はウェールズとアレモリカに位置する [128]。ガリア語は「Ｐ語」とみなされ、あまりよく知られていないヒスパニアのケルト【＝ケルト・イベリア】語は「Ｑ語」であったらしいため、*kʷ を保った第一の波【のケルト移民】が甚だしく西進してアイル

ランドやヒスパニアに至ったのに対し、「P語」の話し手であった第二の波はそこまで西に向かうことなく、ガリアや大ブリテン島に留まったと考えられることも多い。しかし、上記のようにガリア語が一様に「P語」的であったわけではなく、[k^w] と [p] とが長い間にわたって同一音素の多少とも個人的なヴァリアントであったという想定も可能である。

唇軟口蓋音

5.82 [k^w] や [g^w] のような唇軟口蓋音はとても不安定で、ちょっとした刺激ですぐ [p] や [b] に変化しやすいと考えねばならない。この点で示唆に富んでいるのは、多くの言語に現れる海綿を意味する語のケースである。恐らくはその本来的な祖形は *$g^{hw}ong^{hw}o$- であり、これは強意のために同じ子音を重ねた形であって、泥やきのこ、あるいは例えば唇等の粘膜のように押せば凹む、軟らかい素材でできたかたまりを表していたと思われる [原註2]。これに s- が添えられることもあったであろう。その要素がどのような価値を持っていたのかは不明だが、*tegō ～*stegō (129)「私は覆う」にも見られるようにこの添頭は頻繁に行われる。したがって出発点は *$g^{hw}ong^{hw}o$- あるいは *s-$g^{hw}ong^{hw}o$- だが、-o の代わりに末尾を -ā にした「女性の」形態もある。二つの *g^{hw} のうちの一方が他方に異化されて、片方が*b^h に転じることも起こり得る。前者が異化すれば *$sb^hong^{hw}o$ が得られ、これはギリシア語の sphóggos（すなわち sphóngos）に実証される。また、spóggos, spoggiá (130) の形もあり、ここからラテン語の対応形【spongia】が借用され、さらにそこから F éponge、E sponge が得られる。*b^h に転じるのが二番目の*g^{hw} の場合には、*$g^{hw}omb^ho$-、*$g^{hw}omb^hā$ (131) となり、後者から R guba「唇」及び「海綿」が得られる(132)。これに s-を加えれば *s-$g^{hw}omb^ho$- となり、そこから Gmc. *swamb-、さらに G Schwamm (「海綿」並びに「きのこ」) が得られる。Dan. svamp (「海綿」と「きのこ」) や E swamp「湿地」もこれと並行した形態であるが、-b- の代わりに -p- が使われている。第一音節の母音を縮減させた *s-g^{hw}m̥b^h- は *swumb-、後に *sumb- となり、-b- を -p- とした *sump を経て G Sumpf「湿地」へと到達する。Gk. somphós「海綿質の」では語頭で特殊な処理が行われた。

5.83 上記のような異化が行われる場合と逆に、唇音が間隔をおいて後続する唇軟口蓋音に同化する場合もある。Lat. quercus「楢、樫」は *querquus に由来するが、後者はさらに上【5.79】でヘルキーニアの森について述べた際に登場した *perk^{w}us に遡る。ギリシア語の pénte (=*penk^{w}e)「5」と対比すれば、Lat. quīnque に同様の現象が起きていることがわかる。同じ意味の【O】Ir. cóic (133) も二つの *k^w を持つ形に由来している(134)。

緩音化

5.84 ケルト諸語はすべて紀元前の時代から緩音化 (lénition) と呼ばれる作用を受けた。これは母音にはさまれた位置での子音の弱化現象のことである。このプロセスはロマンス諸語の例を使って説明することができる。Lat. sonator「音を鳴らす者」を例に取ると、そこに現れる t は It.

sonatore では保存されているが、Sp. sonador では非常に調音の弱まった d (E this の th を弱くした音) に弱化している。F sonneur では弱化がさらに進んで、問題の子音が消えてしまっている[135]。

5.85 緩音化が生じるのは、重子音 (géminée)、すなわち母音の間で同じ二つの子音の連続が数多く存在する言語においてである。多くのフランス人は illusion の l や sommet の m を重子音として発音している。言語発達の事実が示すところによると、ある言語において重子音の数が相当に増えて、その結果 -atta- のような連続が -ata- と同じ頻度に達したり、あるいは例えば -asta- のような他のあらゆる子音連続よりもはるかに頻繁に生ずるようになる、というような状況も起こり得る。頻度が高ければその情報量は少なくなるのであるから、人々は知らず知らずのうちに、過度に頻度を増した重子音の調音に要するエネルギーを減ずる傾向が生まれる。-atta- は -ata- に近づいて行くのである。他方、相互理解の必要性は相変わらず存在し、例えばフランス語で言えば la dent/ladā/【その歯】と là-dedans/laddā/【その中に】、あるいは il a pris/ilapri/【彼は取った】と il l'a pris /illapri/【彼はそれを取った】とが混同されてはならないのであるから、同じ位置、すなわち母音間にある単純子音が同時に弱化しない限りは、重子音も弱化しようがない。つまり、かつての -ata- が、上記の言語の場合のように、-ada- とか、E thin の th を含む -atha- とかに変化して初めて、-atta- は -ata- に変化し得るのである。

5.86 緩音化はケルト語における古い現象である。その痕跡はガリア語の碑文にも見られ、ギリシア語での名称 kemenoi[136] の m が【フランスの】セヴェンヌ山脈 (Cévennes) の v となっているわけを説明するには、他ならぬこの現象を引き合いに出さねばならない。西ロマンス語に見いだされる緩音化現象は、ラテン語を覚えたケルト語を話す民族の習慣に影響を受けた結果とも考えられる。だが、緩音化は多かれ少なかれどこでも、例えばヘブライ語やフィンランド語にも見られる現象である。この点でケルト語に特徴的なのは、かつては実際に行われた音声的プロセスであった緩音化が、様々な言語の文法の中に痕跡を残していることである。フランス語にこれと同じような現象の痕跡がリエゾンという形で見られるが、これは偶然ではありえない。例えば、Lat. (il) las feminas「これらの女たち」は F les femmes となり、これは非常に古い時代には書いてある通りに、すなわち [les femes] のように発音されていた。(il) los infantes は les enfants となり、かつては母音間の s を [z] に緩音化させて [lezẽfãs] と発音された。今日では le*s* femmes の *s* は発音されなくなったが、le*s* enfants の [z] は相変わらず残っている。ケルト語では曲用の多くの特徴がこれに類した方法で表示されるのである。例としてアイルランド語の beatha「命」という語を取り上げてみよう。これは uisge beatha[137]「命の水、ウィスキー」という複合語の要素の一つである。この語は今日では [bʲɑhə][138] と発音されるが、綴りは非常に古風で、12世紀当時の発音を写している。この語の前に三人称の所有代名詞 a [ə] "his, her, their" を加えるとすると、a 自体は形を変えないのに、所有者が男か女か複数かで beatha の初頭音が変わるのである。所有者が男である場合には、英語で言う his life は a bheatha [ə vʲɑhə] である。女性の場合、her life は初頭音がそのままの a beatha で、したがって [ə bʲahə][139] と発音される。所有者が複数のときは leur vie す

なわち their life は a mbeatha [ə mˈɑhə] である。ここで言う所有代名詞とは、実は古い人称代名詞の属格形であって、したがってフランス語で言えばそれぞれ de lui, d'elle, d'eux に相当する。男性形の属格は、ラテン語でもこの格がしばしばそうであるように、元々末尾に -ī を持っていた[140]。したがって beatha の初頭の b- はかつて母音にはさまれており、規則に従って調音が弱まり [β] (Sp. la vaca「雌牛」の v の音) となり、後にこれが普通の [v] となった[141]。女性形の属格は元々 -s に終わっていた。Lat. pater familiās「家長」[142] の場合と同様である。前にこの -s があったために beatha の初頭の b- は保存されたのである。複数では、属格の語尾は Lat. hominum「人々の」にも見られるように -m に終わっていた[143]。こうして生じた ...m b... という連続は、この言語にある他の -mb- と同様に扱われ、m- に単純化された[144]。

5.87 これと同様に、ブルトン語の「父親」を表す語は、その文法的分脈によって tad, zad, dad の何れかの形を取る。これは幼児語に起源を持つ、古い *tata に由来し、恐らくは E dad, daddy もこれに遡る。

ケルト語の残存

5.88 南のローマ人と北と東のゲルマン人にはさまれ、ケルト人の領土は漸次縮小して行くことになった。これまで長い間、ガリアはゲルマン人が侵入してくる以前に完全にローマ化されていたと考えられていた。今日では、大陸内でもアレモリカのような周辺部やスイスのような到達困難な場所ではケルト語が生きながらえたと考えられるようになってきている。アングロ・サクソン人の圧力にさらされて大ブリテン島のケルト人は西に移動し、あるいはその一部は英仏海峡を渡ったが、そのとき以来ブルターニュと呼ばれることになる地域において、彼らはガリアのケルト語を相変わらず話していた住民に出会ったのである。ブリテン島から新たにやって来たケルト人は南部よりも北部に多く定住し、彼らの話す島嶼ケルト語を押しつけることとなったのであろうが、【ブルターニュ南部の】ヴァンヌのあたりは例外であって、そこでは大陸的な形が保持された。ブルトン語の【４】方言のうちの３つは頭文字がＫＬＴであって、すなわちカンペール、レオン、トレギュの諸方言であるが、これらは何れもウェールズ語と同じく次末音節にアクセントを持つ。他方、残りのヴァンヌ方言は最終音節にアクセントを持っているのである。

5.89 今日、ヨーロッパ西部のケルト語が話される諸地域ではすべて二言語が併用されている。すなわち【フランスのブルターニュ地方では】フランス語とブルトン語、【連合王国のウェールズでは】英語とウェールズ語、【スコットランドでは】英語とスコットランド・ゲール語というようにである。アイルランドではアイルランド語が公式に国語の地位を獲得しているが、この言語も全土に及んでいるわけではない。19世紀の中頃に大飢饉によって人口が激減し、また住民は大挙してアメリカへと脱出してしまったため、それ以来アイルランド語の話し手はこの島の西の周辺の農村住民に限られたままなのである[145]。

トカラ語

5.90 それは20世紀に印欧語学者が経験することになる最初の驚きであった。中国領トルキスタンで、普通はＡ，Ｂと呼ばれている二つの異なる方言で記された文書が発見され、次いで解読されたのだが、これは印欧語の再建に大して影響を与えるものではなかった。この言語が印欧語であることはかなり容易にわかった。つまり、祖語の概念を変え得るような新たな要素はこの言語にはほとんどなかったのである。この言語が記された時代はかなり新しく、紀元７世紀のことであって、そのため語彙はかなり新しくなっていた。この言語が想像力をかき立てたのは、特に、上述したように【5.12】これほど東方にケントゥム語があろうとは予期されていなかったからであった。彼らがこの地方にまでやって来た理由については、仮説さえも試みられていないようである。インドに起源を持つ書記法が用いられていることから解読は容易であるが、その書記法はこの言語の音韻体系にあまりよく合っていない。そこには、例えば t, d, dh の系列をすべて同じ一つの t にしてしまうというように、子音の三系列を混同するという非常に特殊な発達が行われた形跡が現れているのである。言ってみればこのような混乱が生じた代わりに、スラブ語や、領域の反対側のアイルランド語に見られるのと似た現象が行われている。つまり、【子音＋母音という連続において】母音の音色が子音に及んで、母音自体は弱化してしまうという現象である。母音が消え去ってしまえば、子音の総数は原則としてもとの三倍の数となる。tati, tata, tatu という三つの形を例にしてみよう。tati では i の調音が先取りされて tat^{i} となり、tatu からは tat^{u} が、tata からは単純な tat がそれぞれ生じる。このようにして【硬口蓋化音の】$/t^{i}/$,【唇軟口蓋化音の】$/t^{u}/$,【中立的な】/t/の三つが区別されることとなり、いわばこれによって、かつて行われた無声の *t と有声の *d 及び帯気音の *dh との区別が失われた穴が埋められたのである。トカラ語に想定されるこのような発達は文証される言語状態の時点ではすでに完了してしまっているが、奇異に思える母音変異（例えば Gk. gomphós に対する keme「歯」）や、Gk. húpnos や Skr. svapnas に対する špane「眠り」で p と n の間に母音が現れていることに見られるごとく、母音が予期されない位置に置かれる現象が、このような想定によって説明されるのかもしれない。

ヒッタイト語

5.91 1917年に解読されて知られるようになったヒッタイト語は【前述のトカラ語の場合よりも】はるかに大きな反響を比較言語学に与えた。これは紀元前第二千年紀に小アジア中央部にあった【ヒッタイト】帝国の言語であった。ヒッタイト人は、シュメール文字に端を発し、楔形文字と呼ばれるアッカド（あるいはまたアッシリア・バビロニア）の文字を用いていた。そこでは各々の文字は粘土版の上に先の尖った棒を押しつけてしるしを一定数付けることによって書かれていた。これは表意文字と音節文字とで構成される混合システムであった。言語が異なっても、表意文字

は同じ概念を表す。例えば、8という数字は表意文字の一種であって、その形態がvosem′, acht, huitと言語によって様々であっても、ロシア人にもドイツ人にもフランス人にも理解される。シュメール語やアッシリア・バビロニア語を読める人は、ヒッタイト語のテキストの中の表意文字がどう読まれるのかはわからなくとも、その意味が簡単にわかった。他方、そのような人はその意味はわからなくとも、音節文字を発音することはできた。ヒッタイト語が印欧語であるという仮説は【後に】正しいことが判明したが、この仮説によって、内容がわかっている分脈の表意文字にも助けられ、このような発音される要素【＝音節文字の部分】の素性が解明されたのである。

5.92 トカラ語と同様にヒッタイト語もケントゥム語である。しかし、ヒッタイト帝国のほうがずっと西に位置していたため、この点はさほど驚くべきことではなかった。この言語と当時まで再建されていた印欧祖語とを直接結び付けるのに時間がかかったのは、その表記法の性質上、一連の語の形態を同定しにくかったことも一つの原因で、深い断絶があるように感じられたからであった。実際、この言語は、印欧語族に属す他の語派が分離するよりも、ずっと以前に共通の幹から分かれたように思えた。男性と女性が区別されないことや、他語派と同じ形式的要素が見いだされる動詞の活用において、かなり特殊な簡略化が行われていること、また他の点では、実際にはそれまで全く文証されていなかったが、古い時代の祖語を再建する際に、代数的な考察によって想定されるようになった音素の一部が保存されていること[146]、これらすべての点でヒッタイト語は他と一線を画している。また、このような特徴を持つのはヒッタイト語だけではないのである。同じ頃、アナトリアには同じような印欧語が他にもあり、その中でも最もよく知られているのは、ヒッタイト語と同じく楔形文字で文証されるルウィ語である。その他にも、リュキア語やリュディア語があり、これらはアルファベット式に表記され、古代からよく知られた民族の言語である。これらの解釈には問題がある。

5.93 ヒッタイト語は閉鎖音に二類、恐らくは無声音と有声音の区別を持っていたらしい。だが書記法の欠陥のためにこの区別は語中でしか表示されない。すなわち、ほぼ一定して文字を重ねる場合と一文字だけを記す場合とがあり、その後者が他の諸言語の有声音にほぼ対応しているのである。この点その他に現れているように、ヒッタイト語について現時点で我々の持っている知識は確固としているとは言い難く、もっとよくまとまった、よりあいまい度の小さな表記がされる言語のケースと同じだけの確実性を持って主張を行うということは困難である。しかし、この非常に特殊な言語を知ることによって、他の諸言語のデータを解釈する際に、研究者にはある程度自信が得えられたのである。

文献案内

5.94 本章で行った主張や提案のそれぞれに文献の支持を付け加えて、それらの裏打ちをしようとしても徒労に終わるだけであろう。ここには、著者が六十余年の長きにわたって、文献、あるい

は著者の師にあたる方々及び同僚諸氏からのご教授によって得られた、非常に幅広く様々な要素が纏められているのである。ただし、そこには再考と、著者自身の流儀での再解釈が加えられている。例えば、ゲルマン諸方言相互の関係のような特定の一点に関しても、今世紀の間に見解には多くの進展が見られ、二十年代に著者のソルボンヌでの師 Paul Verrier 先生の講義を受けたことから始まって、二年前にシカゴで同僚であった Witold Manczak 氏から伺ったお話まで、私の意見に影響を与えた書物や教えをすべて引用しようとしても全くきりがないことであろう。以下に記すのは、普通の辞書や、上記第四章の註で触れたものを除いて、著者が形態や見解を確認する際に常に手元に置いておく著作のみである。

T. BURROW, *The Sanskrit Language*, Londres, s. d.

A. LESKIEN, *Handbuch der altbulgarischen Sprache*, 6e éd., Heidelberg, 1932.

A. LESKIEN, *Litauisches Lesebuch mit Grammatik und Wörterbuch*, Heidelberg, 1919.

Antoine MEILLET et Jules VENDRYES, *Traité de grammaire comparée des langues classiques*, 2e éd., Paris, 1948.

Holger PEDERSEN, *Tocharisch*, 2e éd., Copenhague, 1949.

Edgar H. STURTEVANT, *A Comparative Grammar of the Hittite Language*, Philadelphie, 1933.

Rudolf THURNEYSEN, *Handbuch des Altirischen*, Heidelberg, 1909.

原註

[1] 以下の部分を理解して戴くために、原著 p. 120【第Ⅶ章】の図表を参照されたい。

[2] その祖形については *Glossologia*, アテネ, 3 (1986) に掲載予定【∵当時】の La phonétique des mots expressifs ; le cas d'éponge に詳しく触れてある【現時点で訳者未見】。同所では、祖形は traintrain【だらだら・うだうだ】や gnangnan【めそめそ・ぐずぐず（の人）】と同じような反復形であって、その二つの音節の各々の初頭子音は g^{hw} で、その前に鼻音が付随していたものとして再建している。以下、原著 p. 169-173【9.112-9.125】を参照。

訳註

(1) 3.11、Ⅲ章訳註4参照。

(2) 496年、メロヴィング朝三代目クロヴィス（5.8参照）が西ゲルマン系の混成部族であるアラマン人を撃破した戦い。この勝利によってフランク王国はライン川中流域にまで領土を拡大した。Tolbiac（ドイツ名 Zülpich）はボンの西方20キロメートルほどのところにある町の名である。

(3) 周知のように、一般的には東ゲルマン語の下位グループが設定される。

(4) 井上 (1986: 1-34) にこの問題の研究史が手際よく纏められている。概略的には例えば Mareš (神山訳1995) に付した訳註2等を参照。

(5) 原著には前提知識を持たないフランス人読者のために、ken'toum と発音する旨が記されているが省略した。私見では kennetoume あるいは quennetoume とでも記した方が筆者の意図に合う。

(6) 一般的には [sētɔm] と表記される。

(7) 1.34に記された主義により、原著者は [ʃ] を [š] で表している。

(8) 以下で適当と判断した場合には sifflante「スー音」を「歯擦音」と訳した。

(9) 原著者は歯摩擦音の歯間音と歯裏音とのヴァリアントを厳密に区別しており、それぞれ [þ] [θ] で表記し

ている。IPA ではそれぞれ [θ] [ð] と表記できる。

(10) ラテン語の c [k] は前舌母音 i, e が後続するとき硬口蓋化を受け、フランス語では [ts] を経て [s] となるが、綴の上では c が保たれる。また、恐らくこの硬口蓋化が終了した後に、a が後続する c [k] が新たな硬口蓋化を生じて [tʃ] を経て [ʃ] となり、ch で記されている。以下 5.10, Bourciez (1937), Carton (1974) あるいは神山 (1995 : 152) 等を参照。

(11) ヒンディー語の発音その他の根拠により、サンスクリットの ś（あるいは ç）は硬口蓋摩擦音 [ç] というよりもそれより幾分か調音点の前進した歯茎硬口蓋摩擦音（あるいは前部硬口蓋音）[ɕ] であった蓋然性が高いと思われる。

(12) 原著では gnō-sco, gnōu-ī と記されているが、形態素の切れ目と長音節を明示し、慣用に従い子音的な u は v と記しておいた。gnō-は直後に出てくる R zna-と同じく IE *gnō-に遡り、その語根は IE *gen-である。ここあるいは5.11に記されたもの以外にも E know や can, ken, G kennen や können 等、あるいはさらに F connaître, It. conoscere 等もこの語根を含んでいる。

(13) ゲルマン第一次子音推移（グリムの法則）による。5.61参照。

(14) 両者とも IE *ker- "horn" のゼロ階梯に接尾辞を付した*kr̥-n-に起因する。*kr̥-n-ū-より Lat. cornū を経て F corne, It. corno 等が、*kr̥-n-o-より Gmc. *χurna-を経て E horn, G Horn 等がそれぞれ規則的に導かれる。r の前に挿入された母音 Lat. o, Gmc. u も規則的である。15世紀にフランス語より英語に借用された corn は「魚の目」の意となっている。E carrot, F carotte 等もこの語根に起因する。

(15) k > h の変化を受けた形態はデンマークの地名 Himmerland にも現れている。2.14参照。

(16) Ludovicus が Louis に到る過程において母音間の d と c の脱落が生じている。西ロマンス語では一般に母音間等の p, b, t, d, c, g はケルト語の緩音化 (5.84以下参照) と同様の変化を受けたと考えられ、有声摩擦音 [β] [ð] [ɣ] に転じた。フランス語は原則として [β] を [v] として保存するが、[ð] [ɣ] は脱落させてしまう。以下の例を比較されたい。Lat. sapere, mūtare, sēcūrus > Sp., Por. saber [β], mudar [ð], seguro [ɣ] ; F savoir, muer, sûr, etc. ただし、重音化等による例外も散見される。Posner (風間・長神訳 ; 1982 : 70ff.) あるいは神山 (1995 : 168f.) 等を参照。

(17) 単数対格。単数主格は cīvitās。ロマンス語は格を失い、(俗) ラテン語の対格の形を一般格とする。F cité (> E city) では母音間の t が保たれており、上註に記したような変化を受けていないが、これは It. città と同様に重音化を受けた形に起因すると考えられる。

(18) cārum は cārus（男性）の単数対格。フランス語では a の前の c は硬口蓋化によって [tʃ] となり、後に破擦音が一般に閉鎖部を失ったため現代語のような [ʃ] となった。本章訳註10参照。

(19) 一般的には [kā] と表記される。私見では [kō] がより正確であるが、この点については神山 (1995: 117, 124, 138) 参照。

(20) 原著者の言うところのサタムの発達とロマンス語における発達の類似性を生成音韻論的に明示化すれば以下の如くなろう。

サタム語において行われた*k の硬口蓋化と*kʷ の非円唇化は次表のような段階を経て達成されたと考えられる。すなわち、初めに*kʷ と*k の対立が存在しており（Ⅰ）、サタム語において*k が何らかの理由で硬口蓋化し（Ⅱ）、*kʷ の円唇化はこの対立の余剰な要素となって結局失われた（Ⅲ）。

	Centum 語	Satem 語
Ⅰ	kʷ : k	kʷ : k
Ⅱ	〃	kʷ : ḱ
Ⅲ	〃	k : ḱ

他方、このような*kʷ と*k の対立はケントゥム語に保持され、ラテン語でも同様であった (Ⅳ) が、俗ラテン語の時代に前舌母音 i e の前にある k が硬口蓋化を起こし (Ⅴ)、その結果円唇化が余剰となって失われた (Ⅵ)。硬口蓋化した ḱ は方言によって異なる発達をし、フランス語の祖先においては [ts] となった。この時点まで a の前では kʷ と k との対立は守られており、フランス語を除くロマンス諸語の祖先においてはそのままの状態が保たれたが、フランス語の祖先の段階において a が前舌化を生じて恐らく [a]

あるいは [æ] と発音されるようになり、それに先行する k が新たな硬口蓋化を起こし (Ⅶ) たため円唇化が余剰となって失われた (Ⅷ)。この新たに硬口蓋化した ḱ は [tʃ] となり (Ⅸ)、後にフランス語が一般に破擦音の閉鎖部を失って摩擦音とした (Ⅹ)。

	i, e の前		a の前	
Ⅳ (Lat.)	kʷ (quis)	: k (cīvitātem)	kʷ (quando)	: k (cārum)
Ⅴ (VL)	kʷ	: ḱ	《	
Ⅵ	k	: ḱ	《	
Ⅶ (OF)	k	: ts	kʷ	: ḱ
Ⅷ	《		k	: ḱ
Ⅸ	《		k	: tʃ
Ⅹ (F)	k (qui)	: s (cité)	k (quand)	: ʃ (cher)

枠で囲った部分を比べれば、サタム語のⅠ～Ⅲのプロセスは、ロマンス語における i, e の前のⅣ～Ⅵのプロセス、及び a の前のⅥ～Ⅷのプロセスと同様であることが見て取れることであろう。

(21) 英音は正確には [wɪtʃ]。米音の表記は [hwɪtʃ] の意味であるが、音韻表記としては [ ] を/ /に変えるだけで充分とは言え、音声学的には第一要素と第二要素は不可分であり、厳密には [w̩ɪtʃ] あるいは [ʍɪtʃ] と記される。かつて英音は今の米音のごときであったが、両者を分かつ二百年ほどの間に [w] と [ʍ] すなわち [w̩] とがほぼ合一し、一般に [w] が用いられるようになった。アメリカ英語はこの点その他でほぼ二百年前のイギリス英語の発音をとどめていると言える。同様のことはまた同じく疑問を表す IE *kʷ-に由来する *wh*at, *wh*en, *wh*ere, *wh*ether, *wh*ither 等についても言え、語頭では唇音性が保たれている。ただし *wh*o (G *w*er) と *h*ow (G *w*ie) では唇音性が失われた。

(22) これは古期アイルランド語の形である。閉鎖音の前あるいは語末の音節を成す IE *m̥, *n̥ はアイルランド語を代表とするゴイデリック諸語では挿入母音 e を、その他では原則として a を獲得する。アイルランド語では末尾の t が先行する n (< m) に有声化（鼻音化あるいは eclipsis と呼ばれる）され、その後で n が脱落して先行する e が代償延長を受けたと考えられる。Lewis-Pedersen (1937: 5) 等を参照。現代アイルランド語では新旧どちらの正字法でも céad と綴られる。また、発音の部分には原著に抜け落ちていた狭音化（硬口蓋化）の記号 (ʲ) を補った。

(23) 原著では jnātā-となっているが、原著者の了解を得た上で jnā-（< IE *gnō-）の過去分詞を記した。

(24) トカラ語という名称はすでに定着しているものの恐らく適当ではない。この点については Krause (1971: 5ff.), 風間 (1989: 1294f.) 等を参照されたい。

(25) 通常の転写法に従えば A känt, B kante. ä の音価は概ね [ə] の類と考えられており、原著者はこの両者を同時に表記したと思われるが、この点についての原著者の意向を伺うのを怠ってしまった。

(26) これはトカラ語Ｂの形。Ａは kus.

(27) 発音表記とは言えないので原著の [ ] を外した。

(28) これは古期アイルランド語の形である。母音間で d が緩音化 (5.84) によって摩擦音となり、最終的に無音化した。現代アイルランド語（新正字法）では croí と綴られ、/kriː/と読まれる。o は元々わたりを記したものだが、その先行子音が非硬口蓋化子音（広音、スラブ語流に言えば硬音）であることを表示している。かつては croidhe と綴られ、d の緩音化が行われたことが明示されていたものの、他方で綴と発音の関係がわかりにくかった。

(29) 原著では末尾の子音の硬口蓋化の表示が抜け落ちていたが、この点を訂正した。第Ⅰ章訳註7に記した方針に従い、かつ各方言の具現が異なるため音韻表記をすると/kalʲíːnʲ/となる。caile は手持ちの辞書には記載されていなかったので不確かだが/kálʲə/と発音されると思われる。

(30) 風間 (1993: 168f.) にこの点についての概説が載せられている。同書によれば、ミタンニ国の王の名である Tušratta, Šutarna, Artatama, Šauššatar はインド語で解釈することが可能であり、サンスクリットでそれぞれに相当するのは tveṣa-ratha-「はげしく (進む) 戦車をもつ」あるいは dus-raddha-「征服されにくい」、su-taraṇa-「よく（敵を）破る」あるいは su-dharaṇa-「よく支える」、ṛta-dhāma(n) -「天則に住まう」、su-sthātar-「よき御者をもつ」であるとのことである。同書にはミタンニ国におけるインド人のその他の形跡についても略述されている。参照されたい。

(31) アケメネス朝ペルシア、特にダレイオス（ダリウス）1世治世下 (522-486BC) の領土拡張時代が含意されている。特にベヒストゥーン大碑文が有名である。ペルシアはトラキア、マケドニアを征服したが、その後三回にわたるペルシア戦争においてギリシアに敗北を喫し、漸次勢力を弱め、ついに紀元前330年に至ってアレクサンドロス大王によりアケメネス朝は滅亡する。

(32) この宗教の第1神アフラ・マズダーにちなんだ呼称が記されている。教祖の名はザラスシュトラ (Zara-θuštra) で、そのギリシア名ゾーロアストレース (Zōroástrēs) から作られた英名ゾロアスター (Zoroaster) の名で呼ばれるのがわが国では普通である。ドイツ名ツァラトゥストラもニーチェの「ツァラトゥストラはかく語りき」(Also sprach Zarathustra) でよく知られている。聖火を護持する儀礼の特質から「拝火教」の名称もしばしば用いられる。7世紀にアラブによってイランが征服されるまでイランの国教であったが、後にシーア派イスラム教に取って代わられた。10世紀以降信徒のインドへの移住が行われた結果、現在ではボンベイを中心にパールシー教の名で存続している。

(33) 幾分古い分類法であり、現在ではこのような説明は行われない。

(34) 原著者にお伺いしたところ、他のブラーフミー系の文字を指すとのご返答を戴いた。北方系に限ってそのおおよその系譜を示すと下記のごとくである。

ブラーフミー（北）
- グプタ
  - スイッダマートリー
    - デーヴァナーガリー
      - グジャラーティー
      - オリヤー
      - グルムスキー
    - ベンガーリー
    - シャラーダー
- カローシュティー

(35) u, ṛ, ḷ のように該当する子音字の下に書かれる場合もある。また、i の要素は子音字の前に置かれる。

(36) 伝統的には cerebral, cacuminal 等と呼ばれ、ローマ字に転写する際には該当子音の下に点を打つことになっている。現代の音声学の用語で言えば本文のように retroflex「反り舌音」である。

(37) 原著者が示唆するように、この表をそのまま祖語の子音体系に一致するとみなすのは現代では一般的ではない。第IX章に詳しいが、大ざっぱに言って問題点は二点ある。まずは二行目の p^h t^h k^h のごとき無声帯気音の系列を祖語に認めるかどうかであって、この系列の祖語における存在を支持するのはほぼサンスクリットのみであることから否定的な受けとめかたが支配的である。次に三～五列の k′:k:k^w（伝統的に gutturals と総称される）の三種の調音点の区別があったか否かであり、これについては研究者間で見解が分かれる。やや優勢なのは二種の喉音 k k^w を設定する立場である。高津 (1954: 61, 66ff.), 風間 (1978: 143ff.), Mayrhofer (1986: 102ff.), Szemerényi (1990: 60ff.) 等を参照されたい。

(38) オスマン帝国が弱体化したのを機に、19世紀末からアルメニア独立の機運が高まったが、これを阻止すべくトルコ内のアルメニア人虐殺・抑圧が数度にわたり様々な名目で行われた。特に多くの死者を出したのは1915年から19年にかけて行われたアルメニア人の南方への強制移住であり、これに反対する者は殺害され、移住の間に息絶えた人々を加えると、その数は少なく見積もっても数十万人に達する。難を逃れたアルメニア人はトルコ領脱出を余儀なくされた。

(39) アルメニア語をイラン語派に属すと考えたのは Lorenz Diefenbach が最初であるとされる。その後19世紀の70年代にこれを否定してアルメニア語を印欧語の独立した一つの語派としたのは Heinrich Hübschmann である。Schmitt (神山訳1998) 参照。

(40) < IE *tṛ s-. ギリシア語で音節を成す ṛ は挿入母音 a を獲得して ar で現れる。√*ters- "to dry" (Watkins 70f.); Cf. E thurst, G Durst, Lat. terra (< *ters-ā "dry land"), Gk. térsō「乾かす」, etc.

(41) 子音結合の簡略化によって脱落を起こし、代償延長を経た形 t′eṛamim も併存する。Gk. térsomai「乾く」と同じ構成であり、むしろこの語が対比に適当かもしれない。以下、アルメニア語として引用されるのはすべて古典アルメニア語の形である。これは恐らく西暦407年に Mašt(′)oc′ とも呼ばれた聖 Mesrop が文字を考案し福音書の翻訳を行ったときに記された言語である。

(42) IE *dei-u- "to shine" (Watkins 10) のゼロ階梯*diu-より。対比に引かれたラテン語形の方が説明が難しい。語根にゼロ階梯、接辞に正常階梯を持つ形は*di-eu-=*dieu-だが、ここからから何らかの理由で延長階梯となった対格*diēu-m > diēm から主格 diēs が逆成されたとの説もある (Palmer1954: 250f.) が、u の脱落による単なる代償延長ではないかとも疑われる。Szemerényi (1990⁴: 141) によれば *dieu-が本来の正常階梯の形で、ゼロ階梯 *diu-から二次的な母音交替によって*deiu-が生じるとされる。

(43) 恐らく再建形としては*dhugH_2-ter-が最も有望である。この語の再建に関する諸問題については神山(1992)

等を参照。アルメニア語形を導くのは難問で、*dhugHter- の H が母音化せずに先行子音を帯気音化して *dhughter-、規則的に子音推移と第一音節以外の母音脱落を経験して*dugt'r までは来るが、ここから dustr を得るのは困難である。Schmitt (1981：75) に試案があるが説得力に欠く。

(44) Ziegler&Sontheimer (1979：IV, 417) によれば今日では Palase と呼ばれているらしく、また Stier et al. (1956：9) で Palaeste が記された位置はケルキラ島よりも北方であるから今ではアルバニア領と思われるが、残念ながら現在の地図には発見できなかった。

(45) IE *woik-o-<*√weik- "clan" (Watkins 75). Cf. OCS vьsь, E vicinity, etc.

(46) Pokorny 608には thëní „Laus"が載せられている。同所及び Watkins 32は IE *knid- "(egg of) a louce" を基礎としており、そうなるとアルバニア語やギリシア語の k と n の間の母音は挿入母音と説明されることになる。

(47) *dekm̥「10」のゼロ階梯に接尾辞を付けた双数形*-dkm̥-tī >*- (d)gm̥tī (?) 等より導かれるのだろうが E wide, G weit にも見える*wi- "apart, in half" (Watkins 78) の *wī- への延長化及び k > g の有声化の説明はむずかしい。Szemerényi (1990:238) は概して次のような説明法を記している。①まずは後要素初頭の d が脱落して、前要素末尾の母音、あるいはソナントが代償延長される。②その結果「40, 70, 90」の前要素末尾には成節長ソナント r̥̄ m̥̄ n̥̄ が生じるが、これがラテン語で rā mā nā となる際に、新たに後要素初頭となった k が g に有声化される。③*-gm̥t- >*-gemt- >*-gent-が「20, 30, 50, 60, 80」の場合にも一般化される。成節の鼻音は挿入母音 e を得るのがラテン語の常則である。④こうして得られた「20」*vī gentī の第二音節の母音が同化によって i となり、これによって得られる-gint-が「20～90」すべてに再度一般化される。特に②の過程が説得的とは言い難い。アルバニア語でもラテン語の場合に類する k の有声化が行われたのであろうが詳細は不明。

(48) Gk. gómphos, R зубは Skr. jámbhas, Lith. žaũbas 等と同じく IE *gembh- "tooth, nail" (Watkins 19；むしろ「噛む」か?) の o 階梯*gombh-o-より。Alb. ðemp は正常階梯からに見えるが詳細は不明。E comb, G Kamm は Gmc. *kambjan < IE *gombh-j-o-m より導かれる (*ibid.*)。

(49) IE *ergh- "to mount" (Watkins 17) に起因するとされる。o 階梯を持つ例えば Gk. órkhis「睾丸」はその球根の形状より「蘭」の意で E orchid, G Orchidee, F orchidée, R орхидéя等に借用されている。これをさらに IE *er- "to move, set in motion" (*ibid.*) からの派生と考えてよかろう。後者の o 階梯は Gk. órnūmi「私は動かす」, Lat. orior「私は持ち上げる」、さらにはその現在分詞 orient- (> e. g. F orient) 等に見られる。

(50) Gk. húei <*sū-j-et-. 語根は IE *seuə- "to take liquid" (Watkins 58) とされ、ゼロ階梯*suə-より*sū-が導かれる。Alb. šī については不詳。E sip, sup, soup, suck, soak 等もこの語根に起因するらしい (*ibid.*)。Skr. su-「(ジュースを) 搾る」や OHG sou「ジュース」も比定されている (Gemoll 776)。この語根には同音意義の IE *seuə- "to give birth" (Watkins 58) があるとされ、そのゼロ階梯から Skr. sūnús, Gk. huiós, Goth. sunus, Lith. sūnùs, OCS synъ, E son, G Sohn 等が導かれるが、「(精液を) 注ぎ込む」から「生を与える」の語義が発達することは充分に考えられ、私見では両語根は一致するのではないかと思う。E sour, R сырой 等は IE *sūro- "sour, etc." (Watkins 67) からとされているが、語義の発達に難はあるものの上記語根に由来する可能性もあろう。

(51) Lat. sulcus は IE *selk- "pull" の o 階梯より説明される (Watkins 57)。閉音節で o は規則的に u となる。Alb. hel'k'は正常階梯に見える。Gk. hélkō「私は引く」に正常階梯が、対応の名詞 holkós に o 階梯が現れている。

(52) Lat. serpō は Gk. hérpō「私は這う」, Skr. sárpati「彼は這う」と同じく IE *serp- "crawl" (Watkins 58) に起因する。アルバニア語の形は Skr. sarpas「地を這う；蛇」とともに o 階梯に起因するように見えるが不詳。

(53) これはアレクサンドロス大王のマケドニアの言語であり、旧ユーゴスラビアの構成部分たる現在のマケドニア共和国に行われるスラブ語の一つとしてのマケドニア語とは全く異なる。

(54) 本来的にプロシア（プロイセン）とは現在のグダニスク（ダンツィッヒ）とカリーニングラード（ケーニヒェスベルク）を含むバルト海沿岸のグダニスク湾周辺地域の地名であり、現在ではポーランドとロシア連邦飛び地に跨っている。この地は11世紀頃からポーランドに支配され、13世紀にはドイツ騎士団が到来し、ドイツ騎士団領、次いでプロイセン公国となってドイツ化が押し進められた。その結果、こ

の地に行われたバルト語である古プロシア語は17世紀末に消滅の憂き目にあった。僅かに残されたこの言語の資料の中で恐らく最も重要なのがここに記された Katechismus であって、ルター作のドイツ語原文が左ページに、その翻訳が右ページに記されるパラレルテキストの形式を取る。計三種があり、井上 (1980) に倣って年代の古い順にそれぞれⅠ、Ⅱ、Ⅲと呼ぶことにすると、ⅠとⅡは1545年に、Ⅲは1561年にケーニヒェスベルクで刊行されている。Enchiridion とも呼ばれるⅢは最も大部であり、ドイツ人牧師 Abel Will が Paul Megott という名の通訳の協力を得て作成したものであるが、Will 自身の古プロシア語の知識は頼りないものであったらしい。これ以外の重要な資料に1400年頃の Das Elbinger deutsch-preussische Vokabular 及び1517-26年頃の Das preussische Vokabular des Simon Grunau の二つの語彙集がある。

(55) Pokorny223 は *dn̥ĝhū-「舌」と、二次的な*dn̥ĝhuā- を立ててバルト、スラブのみならずイタリック、ゲルマン、ケルト等の形を一気に処理しようとしている。すなわち、前者より語頭音の脱落した *n̥ĝhū- より OPruss. insuw-is, PS *inzū-ko- > CS *j-ęzykъ > R jazyk, etc. が、またゲルマン語では子音推移と n 語幹化を経た Gmc. *tungō-n- より Goth. tuggō, OHG zunga, G Zunge, E tongue, etc. が、さらに後者の形より Lat. lingua (<*dingua), F langue, etc.; OIr. tenge, Ir. teanga, etc. が説明されることになる。*n̥ の添頭母音が各語派で異なるのを含めて、発達は期待通りで、非常に魅力的な説明法だが、バルト・スラブでの語頭の d の脱落が不可解である。リトアニア語の liežùvis「舌」が本来 *diežùvis であって、liežti「なめる」の影響で語頭音が置き代わったとすると、d の脱落はバルト・スラブ共通の局地的現象とみなせなくなり、いっそう不可解の感が深まる。Černyx Ⅱ 468 は CS *językъを*v-ęz-ati の*ęz-「結ぶ」から説明し、OPruss. の形とは偶然の一致としているが、これでは何の問題解決にもならない。

(56) 再建の問題については4.9ff. 及びⅣ章訳註19～23を参照。

(57) 一般の二重母音ではなく、比較文法で言う diphthongoid（二重母音的結合、疑似二重母音）、すなわち母音とソナント（i u r l m n）の結合を指す。

(58) 時に intonations とも呼ばれるが、文音調と誤解される恐れが多分にあり好ましくない。

(59) 以下に登場する acute は印欧祖語の本来的長母音あるいは音節主音的長ソナント（すなわち喉音理論によれば「母音＋ H」あるいは「ソナント＋ H」）に、circumflex は二重母音あるいは二次的に生じた長音節にそれぞれ生じる。この事実を明らかにしたのは「一般言語学講義」であまりにも名高い Ferdinand de Saussure である。

(60) < IE *gnō- : √*gen-. 5.11及び本章訳註14参照。

(61) (ˉ) ばかりでなく (ˆ) や (ˆ) も同じく circumflex と呼ばれ、フランス語では普通その二番目の符号が用いられるが、リトアニア語ではギリシア語と同様に一番目の符号が常用される。

(62) (PS *ei-tei >）OCS iti (R идти) と同じく、IE √*ei- "to go" (Watkins16) に不定形を作る接辞 -ti (<*-tei) を加えて作られている。同じく正常階梯に起因する形として Lat. eō（<*ei-ō) "I go", Gk. eī-mi, Skr. éti (<*ei-ti) "(he) goes" 等がある。ゼロ階梯に接尾辞を加えて Lat. i-ter「旅」、(*i-dh- > PS *idō-N > CS *j-ьdǫ >）OCS idǫ (R иду) "I go" 等が派生する。

(63) この現象は言語の別を問わず頻繁に生じ、代償延長 (compensatory lengthening, Ersatzdehnung, allongement compensatoire, заменительное удлинение) と呼ばれる。ここではいわゆるラリンガル H、すなわち Ferdinand de Saussure の言う coefficients sonantiques の脱落が含意されている。H の脱落によってその先行母音は印欧祖語の長母音となりバルト・スラブ語で acute 音調を獲得する。

(64) 今のフランス語では長短の区別はなく、a が [a] であるのに、かつて長音であった â は [ɑ] と発音されることにこの現象の痕跡が残されている。pas のように綴の上では脱落が生じていなくとも、実際は末尾の [s] が脱落していて、結果的に a が â と同じように [ɑ] と発音されるようなケースもある。ただし、今のパリを中心としたフランス語では [a]-[ɑ] の差異は失われつつある。Carton (1974), 滝沢 (1981) 等、あるいは神山 (1995 : 116, 117) 参照。

(65) ただしスラブ語のデータはこれと矛盾する。すなわちリトアニア語の場合と逆に acute は上昇的、circumflex は下降的であったと考えられている。

(66) 訳語はロワイヤル仏和中辞典による。一般的な用語で言えば逆行同化 (assimilation régressive) の一種と言えよう。

(67) IE *kṃtom「百」から期待されるスラブ語の形は PS *siNta (*suNta) > (O)CS *sęto (*sǫto) である。実

際にはこの語では期待される *m̥/n̥ > CS *ę(ǫ) の代わりに OCS ъが現れ、例えばロシア語の sto（OR sъto）となっている。そのためこの語が借用語ではないかとも考えられ、原著者はこの説を取っている。ただし、この借用説に反対の立場を取る研究者も多々いる。例えば Meillet (1934: 63) を参照されたい。

(68) R хлеб,, OCS chlěbъ 等がゲルマン語からの借用語であることはまず間違いないが、それがゴート語からかどうかが問題である。貸し主として Goth. hlaifs, 属 hlaiβis を想定すると、語幹末の [β] (あるいは [f]) が [b] として受け入れられると考えねばならない点に少々無理があろう。R ropoд等 (< CS *gordъ) については、これを印欧祖語起源と見る説とゲルマン語借用説の二説があるが、訳註者は原著者と同じく後者に傾いており、その場合には貸し主が Goth. garðs である可能性は大である。[ð] はスラブ語に [d] で受け入れられるのが常だからである。これらについて詳しくは稿を改めたい。

(69) 例えばロシア語の接頭辞 vy- は完了体を構成するときには常にアクセントを有する。逆に不完了体を構成するときには vygljadeti (G aussehen より翻訳借用) 一語を例外として常にアクセントを持たない。この事情はロシア語の他の接頭辞と比べて、確かに非常に特殊である。

(70) これがスラブ語が長短の対立を持っていた時代 (PS) に借用されたのならば、開音節化によって末尾の子音が脱落して*ūt >*ū、語頭で添加音 v を得て*vū、長短の対立を失って (CS) *vy となるのが予想されるから、借用の想定に全く無理はない。ただし ot と u については要調査。

(71) 原著には前提知識のないフランス人読者のために、hier「昨日」と同じように読む旨の注意書きがある。

(72) 原著では無音の e が ʼ と記されているが、フランス語をよく知らない読者の便のため正書法に従って記し、無音でない e には下線を付した。

(73) 一般的には Grammont による「三子音の法則」(règle des trois consonnes) が知られている。これは、さもなければ 3 つあるいはそれ以上の子音が連続してしまうような場合に e が [ə] と発音され、それ以外の場合には e は発音されないとするものである。

(74) スラブ語には *pəter- の反映はない。ここに記された語は本来的に幼児語と想像される *atto- (Watkins 4), *ato- (Pok. 71) に起因する。風間 (1984) 参照。また、スラブ語以前の形は *at (t)-ik-o- と想像されるが、スラブ語の時代には a と o の区別は行われず、a を用いて表記するのが一般的となっているため、*atīka- と表記することもできる。

(75) *i に続く *k が c [ts] となる現象は高名な Baudouin de Courtenay によって初めて指摘され、普通には第三（硬）口蓋化と呼ばれている。その出現の厳密な条件と相対年代を特定するのは困難を極める。

(76) IE *kreuə- "raw flesh" (Watkins 32) が再建される。Gk. kré (w) as「肉」, Skr. kravís「生肉」また、E raw, G roh 等も参照。

(77) IE *or- "large bird" (Watkins 46)、あるいは *er-, *or- (Pokorny 325f.) が再建される。様々な接尾辞が加わって、Gk. órnis (<*or-n-īth-) は鳥一般を、Goth. ara, E erne, G Aar, Lith. erēlis 等は OCS orьlъと同じく「鷲」を表す。

(78) IPA に準じた表記法を採れば *arʲəlʷə あるいは *arʲəɫə となる。

(79) 古英語の通常の形は milc, meol (o) c.

(80) 初頭の he- の部分はつまびらかでない。一説に*hem-katón (<*sem-kṃtóm "one hundred") から m の部分が脱落したのではないかと考えられている。

(81) IPA では [̥] は無声化の意味だが、原著者は音節主音的 [̩] の意味で用いている。[r] は当然ながら歯茎顫動音のことではなく口蓋垂摩擦音 [ʁ] のこと。Grammont の三子音の法則に従った発音だと [dapʁeskə mdiz]。無声の [p] が隣接するため [ʁ] はしばしば無声化する。

(82) 挿入母音 (anaptyxis) と呼ばれる現象である。現代諸語の例については神山 (1995 : 206f.) を参照。

(83) 5.12及び訳註25参照。

(84) *velō (Cf. inf. velle) > Lat. volō「私は欲する」, *seluō > solvō「私は解く」等にも見られるように、l の前にある e が o に転じることがあり、この場合の l には普通後舌母音が後続し、したがって l が唇軟口蓋化した [ɫ] であったとみなされる (Palmer 1954: 215)。だが、本文に挙げられた例語はこの音声環境にない。特にギリシア語から el-ではじまる語をラテン語が借用した場合には、その後続する音の如何に関わらず ol-が現れることが多く、子音が後続すれば規則的にさらに ul-となる。この変化の音声学的意味付けは難問である。

(85) 原著では誤植によって Astyanax と記されている。

(86) IE *wen- "to desire, strive for" (Watkins 76, Pokorny 1146f.) のゼロ階梯 *wn̥- に由来すると思われる。母音が続けば *n̥ は規則的に an となる。Gemoll 57も„vgl. ai.【=Skr.】 *van* bemeistern, an.【=altnordisch, ON?】 *vinna* arbeiten, nhd.【=G】 *gewinnen*"と記していることからそのような見解を取っているらしいがその例はいずれも正常階梯に見える。

(87) より正確にいえば、当時のギリシア語では声門閉鎖音が弁別的な音素ではなかったということである。生理的に言って恐らくすべての言語においてそうであるように、古代のギリシア語でも声門閉鎖音は存在していたと考えられる。

(88) 文字の名称としては wau とも、あるいはガンマ (Γ) を縦に二つ重ねたようにも見えるので digamma (二つのガンマ) とも呼ばれる。[w] の音は古典ギリシア語ではすべての位置で脱落してしまったため、普通にはこの文字は用いられない。

(89) IE √*leikʷ- "to leave" (Watkins 36) より*leikʷ-ō > Gk. leípō だが、ラテン語の現在形はゼロ階梯の語根に鼻音接中辞 (nasal infix) を加えて *li-n-kʷ-ō > linquō、完了形はゼロ階梯の語根から二次的な延長 (vr̥ddhi) を伴って *līkʷī > līquī となっている。E lend, loan, e*leven*, twe*lve* も同じ語根を含んでいる。

(90) IE *kʷi-s に由来する。

(91) ギリシア語において、例えば *kʷ は i e の前では t に、a o 及び子音の前では p に、u の前では k に転じている。

(92) Gk. boū-s, Skr. go-, gau-h, OCS gov-ęd-o (Cf. R говядина「牛肉」), Gmc. *kōuz >*kūz (> E cow, G Kuh), etc. と同じく IE *gʷou-に遡る。IE *gʷ のラテン語における正則的な対応音は v [w] である。Palmer (1954 : 37, 227) 参照。ラテン語のパラダイムが不均一な点については同書251を参照。

(93) IE *bh はイタリック語派では f で現れるのが普通だが、ラテン語は母音間で f より以前の段階でこれを有声化し b とした。Palmer (1954 : 37, 226) 参照。恐らく*bh はイタリック語で無声化して*ph、さらに摩擦音化して*[ɸ] より f となったと思われる。無声化する過程はギリシア語と共通である。ラテン語は*ph あるいは*[ɸ] の段階で母音にはさまれたとき有声化を生じて b を得たと考えられる。有声音間での有声化については例えば神山 (1995 : 144ff.) 参照。

(94) レト・ロマンス語はロマンシュ、ドロミテ、フリウリの三言語の総称である。ここでは特にロマンシュ語を指すと思われる。

(95) 主格は cor. *cord から末尾の子音が脱落している。

(96) 主格はそれぞれ odoús, dēns. 前者は o 階梯の*odont-s より、後者は*dent-s より語幹末の子音の脱落が行われ、それに伴って先行母音の代償延長が行われている。この語 IE *dent-は本来的に IE *ed- (< *H_1ed-)「噛む、食べる」の分詞と考えられ、「歯」のギリシア語形で語頭に現れる母音 o は*H_1 が母音化したものとみなされる。*H_1は母音化すると普通 e となるから、o の響きを持つ*H_3を予想するほうがよいのかもしれない。この点は難問である。Lindemann (1982) 等を参照。

(97) 5.5及び訳註12を参照されたい。

(98) 原著には la glotte「声門」が記されているが、定義上声門とは声帯が振動していない状態を表すので訳では「声帯」とした。神山 (1995 : 28) 参照。

(99) これは気音 (aspiration) のことであり、これに要する時間を VOT (voice onset time) と呼んでいる。

(100)原著者は左右逆になった ʁ の記号を用いるがフォントの関係で IPA を記す。

(101)古典期の帯気音 ph th kh は摩擦音 [f] [θ] [x] に転じている。5.46参照。

(102)IPA ではそれぞれ [β ð ɣ ɣʷ] と記される。簡易的な記号 [b ḍ ḡ ḡʷ] も用いられることがある。

(103)-red の部分は Gmc. *raðam に遡り「数」を意味すると考えられている。後者は G reden, Rat にも見える *rē- のゼロ階梯 *rə- を含んでいるが、これが *ar(ə)- "to fit together" (Watkins 3) と一致するかどうかはよくわからない。

(104)原著では誤植により trève となっているが原著者の了解を得て訂正した。

(105)原著ではその意味を《célèbre》「名高い」としているが、原著者の了解を得て《célébrité》に訂正した。

(106)例えば英仏語の hostile に見られるように、近代にラテン語の hostis は主として「敵」の意で借用されている点に注意を喚起している。

(107)Asgard に住むとされる北欧古代の神々。英名は pluralia tantum の Aesir (あるいは Asar). これは古ノルド語からの借用語で、原語での単数形は āss "god". 以下に記されているように、後者は OE ōs や Goth. ans とともに*ansaz に遡ると考えられる。これはさらにアヴェスタの最高神 Ahura mazdā の前要素と比定され、これが *n̥su-ro- と再建され得ることから、印欧祖語の*onsu-あるいは*ansu-が本来の形であったと考えられ得る。Pokorny 48, Watkins 3 は *ansu- を採用している。ゲルマン語は本来的な u-語幹を o-語幹としてしまったと考えられる。

(108)一般に摩擦音の前にある鼻子音は口腔内での閉鎖を失い、鼻母音となりやすい。国語学で撥音とも呼ばれる日本語の「ン」も同様の現象を生じており、例えば「フランス」や「デンシャ」の下線部はそれぞれ鼻母音 [ɑ̃] [ĩ] として実現されている。ポーランド語のいわゆる「鼻母音」ą ę も摩擦音の前の位置では真の鼻母音として発音される。詳しくは神山 (1995: 138f., 222f.) 参照。他方、摩擦音に先行する鼻子音の調音を頑なに保持すれば、例えば英語の tense が tents と同一の発音となることに見られるように、鼻子音と摩擦音の間に鼻子音と同じ調音点を持つ閉鎖音が挿入される。詳しくは神山 (1995 : 209ff.) を参照のこと。

(109)硬口蓋閉鎖音、すなわち IPA では [c] のことと思われる。

(110)原著には《vendre》「売る」が記されているが原著者の了解を得た上で訂正した。

(111)初版の arienne を採った。原著者によれば第二版に記された aérienne は単なる誤植だとのことである。

(112)IE *del- あるいは Gmc. *taljan の段階から「語る」と「数える」の両義を備えていたらしい。英語の tell も古くは「数える」の意味をも持っていた。原著に引かれる zahlen「支払う」は古高ドイツ語時代に作られた語であり、ドイツ語の例としては zählen「数える」がより適当である。古い「語る」の語義はこれに接頭辞を加えた erzählen「物語る」に限局されている。

(113)ゲルマン語より借用。普通の「歯」の意味では Lat. dens の対格 dentem に由来する由緒正しい dente が用いられる。

(114)「高地ドイツ語」Hochdoeutsch はまた文語の意味でも用いられる。「低地ドイツ語」Niederdeutsch は純粋に方言学上の用語だが、ほぼ同義の Plattdeutsch は文体的に低俗な民衆語のようなニュアンスでも用いられる。

(115)周知のことだが、ベルギー領内の同言語はフラマン語と呼ばれるのが慣用となっている。

(116)当時ラテン語起源の h はすでに全くの無音であり、このとき採用された h は当初は有音であったはずだが、後にやはり無音となった。ただし、この経緯によってリエゾンやエリジオンに関する扱いが異なっており、周知のように現代フランス語の用語では前者は無音の h、後者は有音の h と呼ばれている。

(117)トゥールーズ南方の都市名。

(118)Hauteville という地名はフランス最北部に近いカレ近郊にもあるが、ここで含意されているのはリヨンとジュネーヴの中間にある Hauteville-Lompnes と思われる。ここで h が綴られているのは北部方言の影響ということになろう。

(119)フランス語では a の前の c [k] は硬口蓋化によって ch [tʃ] を経て [ʃ] となり、au >/o/、母音間の s [s] > [z]、語末の a は e となるから、Lat. causa はフランス語で非常に規則的に chose となる。これらの現象の詳細については神山 (1995 : 145,152,162) 参照。他方、後代にラテン語から再度 causa が借用されて cause となり、両者が併用されるようになった。現在では意味の分化が行われている。

(120)母音に先行する成節の流音は何れの語派においても「短母音 (i u a) ＋流音」として現れるが、子音に先行する場合にはケルト語は他語派と異なり「流音＋ i」の反映を持つ。Lewis-Pedersen (1937 : 4ff.), 高津 (1954 : 89ff.) 等を参照。音声学的に言えば、発音を容易にするための挿入母音 (anaptyxis) が生じていると考えられる。挿入母音は発芽母音 (独 Sproßvokal) や寄生母音 (仏 voyelle parasite) 等とも呼ばれることがある。この点については神山 (1995 : 205ff.) 参照。

(121)*kamb-o-rit-o-と分析され、前要素は「曲がった」(krumm) の意とされる (Stokes-Bezzenberger (1979: 78))。Cf. Ir. cam「曲がった」(以前は camm と書かれた ; ∵*mb > Ir. mm ; Cf. Lewis-Pedersen (1937 : 39f.), Rialtas na hÉireann (1986 : 292)). Gk. skambós "bandy-legged" (Lewis-Pedersen 40) との関連から、その語根には IE *(s)kamb- "to curve, bend" (Watkins 58, Pokorny 918) が立てられている。恐らくケルト語からラテン語に借用されて (*kamb-y- >) cambiō「取り替える」が生じ、そこからさらに (O)F changer を経て

E change が生じたとされる。

(122)原著には*perkus と記されているが原著者に問い合わせたところ誤植だとのことである。IE *perkʷus "oak" (Watkins 50, Pokorny 822). E fir「樅」や G Föhre「赤松」等もここに由来する。

(123)IE *p はケルト語において両唇摩擦音 [ɸ]、次いで概ね声道摩擦音 [h] の段階を経て無音となった。Lewis-Pedersen (1937 : 26f.). 日本語のハ行子音の変遷（[p] ＞ [ɸ] ＞ [h], etc.）やカスティリア語における [f] ＞ [h] ＞ゼロの過程を想起させる変化である。

(124)IE *gʷou-. 訳註92を参照されたい。

(125)1948年に綴りの改新が行われ ceathair と綴られるようになった。標準となりつつある発音は [kʲáhərʲ] である。

(126)例えば、Epo-sognatus (原義 "well-accustomed to horses")、Epona (原義 "horse-goddes"). Cf. Lewis-Pedersen (1937 : 3).

(127)現在の綴りは each で、[ɑx] あるいはむしろ [ɒx] と発音される。

(128)これはいわゆる島嶼ケルト語内の分類であり、以下にも記されるように大陸ケルト語の中ではケルト・イベリア語もQケルト語に属す。

(129)* (s) teg- "to cover" (Watkins 65, Pokorny 1013). s-mobile と呼ばれる s が添頭されることもあり、例えば「私は覆う」は Gk. stégō、Lat. tegō である。Cf. ent*decke*n. 3.11の *s*uper-～ uper-、及びIII章訳註1も参照のこと。

(130)ギリシア語では軟口蓋音の前のγは [ŋ] と発音される。また、これらの形態のうち sphóggos はアッティカ形、spoggiá は新たな形とされ (Gemoll 684)、一般的なのは spóggos である。

(131)原著では*gʰʷombho-、*gᵇʷombha となっているが原著者の了解を得た上で訂正した。

(132)R губа は主として「唇」あるいは「きくらげ」の意味であり、「海綿」を表すのはその指小形の губка であるため、原著者のこの部分の記述は正確ではない。OCS gǫba は「海綿」の意味のみで用いられたが、Cz. houba、Bg. гъба、OR губа 等の語義から推察すれば、この語は本来的に「海綿」と「きのこ」の意味を持っていたと考えられる。R губа が例外的な「唇」の語義を獲得したのは16世紀以降のことらしい。Černyx (1993 : I, 225). したがって *gʷʰomgʷʰo- が元々「唇」の意味をも持っていたとする点に関して原著者の見解はかなり疑わしいと言わざるを得ない。

(133)現代アイルランド語では cúig [ku : gʲ].

(134)IE *penkʷe より語頭の唇音が第二音節の唇軟口蓋音に同化した *kʷenkʷe を経てラテン語とアイルランド語の形に到達する。その逆に、第二音節初頭の唇軟口蓋音を語頭の唇音に同化した *penpe＞*pempe より Gmc. *fimf、さらに E five, G fünf が作られている。

(135)訳註16を参照されたい。

(136)Kémmenon (Gemoll 431) が通常の形だが、m が一つの形を想定しないことにはここから Cévennes の v は得られない。

(137)周知のようにこれが英語に借用されて usquebaugh、whiskybae を経て末尾を略した whisk(e)y に至っている。uisge は新正字法では uisce と綴られる。Rialtas na hÉireann (1986) によればその発音は [íʃkʲe] だが、Dillon (1961) 及び土居敏雄先生から戴いた付属の録音によれば [íʃgʲɪ] あるいはむしろ [íɕgʲɪ] のような発音もある。

(138)IPA に従い、アクセント位置を明示すれば [bʲúhə]. 硬口蓋化子音（狭音）に後続するときの/a/は前舌化され [bʲáhə] や [bʲæhə] のように聞こえる。

(139)原著には誤植があり [ə biɑhə] となっている。

(140)最も生産的な幹母音-e/o-を持つ曲用の単数属格の語尾は一般には-osyo あるいは-oso であるが、イタリック語派とケルト語派には起源不明の -ī が用いられる。例えば dominus「主人」の属格は dominī である。Palmer (1954 : 243), 高津 (1954 : 230) 参照。

(141)このように母音間で子音が弱化することによって生じる緩音化は bheatha のように問題の子音に h を加えて表示されるので「帯気音化」(aspiration) のように呼ばれることもある。また bh は音素表記では/v/と記されるのが慣用だが、その発音は原著者の記すような [v] よりもむしろ [β] や [w] が普通らしい。

(142)下線は訳者による。分かたずに paterfamiliās とも綴られる。第一変化とも呼ばれる ā-語幹名詞の単数属

格の本来の語尾は-ās であり、この慣用的表現に古形が残った。古典ラテン語の時代にはこの本来の語尾は、o-語幹の-ī (訳註140参照) の類推から、-āī >-ae に置き換えられた。高津 (1954: 224f.), Palmer (1954: 241) 参照。

(143)一般には *-om あるいは *-ōm が再建される。

(144)綴りの上では mb-と書かれる。この現象は鼻音化 (nasalization) あるいは eclipsis と呼ばれる。

(145)土居 (1988a) に日本語での簡便な解説があるので参照されたい。

(146)Ferdinand de Saussure によって想定され、後にラリンガルと呼ばれることになった一連の音が含意されている。9.30ff. を参照されたい。

参考文献（訳註・補遺）

Bourciez, Édouard. 1937. *Précis historique de phonétique française.* 8e édition. Paris.

Carton, Fernand. 1974. *Introduction à la phonétique du français.* Paris.

風間喜代三 1989. 「トカラ語」『言語学大辞典』第２巻. 三省堂.

Krause, Wolfgang. 1971. *Tocharisch.* Handbuch der Orientalistik. Erste Abteilung : Der nahe und der mittlere Osten. Band IV : Iranistik. Dritter Abschnitt. Leiden/Köln : Brill.

Krause, Wolfgang & Thomas, Werner. 1960. *Tocharisches Elementarbuch.* Bd. I : Grammatik. Heidelberg : Winter.

Lindemann, Fredrik Otto. 1982. *The triple representaion of Schwa in Greek and some related problems of Indo-European phonology.* Oslo-Bergen-Tromsø : Universitetsforlaget.

Meillet, Antoine. 1934. *Le slave commun.* Seconde édition, revue et augmentée avec le concours de A. Vaillant. Paris.

直野敦 1988. 「アルバニア語」『言語学大辞典』第１巻. 三省堂.

Sadnik, Linda & Aizetmüller, Rudolf. 1955. *Handwörterbuch zu den altkirchenslavischen Texten.* Heidelberg.

Schmitt, Rüdiger (神山孝夫訳) 1998.「古典アルメニア語歴史文法」(その１)『ロシア・東欧研究』第２号. 大阪外国語大学ヨーロッパＩ講座.

Срезневский, И. И. 1893-1912. *Материалы для словаря древнерусского языка.* Москва.

Stier, Hans-Erich et al. (red.) 1956. *Grosser Atlas zur Weltgeschichte.* Westermann.

Stokes, Whitley & Bezzenberger, Adalbert. 1979[5]. *Wortschatz der keltischen Spracheinheit.* Unveränderter Nachdruck der 4. Auflage von 1894. Göttingen : Vandenhoeck und Ruprecht.

滝沢隆幸 1981. 『フランス語発音入門』 海出版社.

Ziegler, Konrat & Sontheimer, Walther (red.) 1979. *Der kleine Pauly. Lexikon der Antike.* Auf der Grundlage von Pauly's Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft unter Mitwirkung zahlreicher Fachgelehrter. DTV.